NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集 Ⅰ
・職業奉仕講演集 Ⅱ
・職業奉仕講演集 Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第1章

ポール・ハリスの生い立ち
(1) 幼年期～学生時代

ウィスコンシン州ミルウォーキー市から南に40Km、ミシガン湖に面したところに、ラシーンという街があります、ロータリークラブ本部のあるエバンストンからは北へ80Kmの地点です。そのラシーンの街で1868年4月19日、ポール・パーシー・ハリスは生まれました。

彼の家系は、アメリカ東北部ニューイングランド地方のヴァーモント州ウォリングフォードに土着した敬虔なピューリタンである祖父ハワード・ハリスと祖母パメラとの間に5人兄弟の一人として、父親ジョージは生まれました。母はコーネリア・ブライアンといい、近郷の良家の娘でしたが浪費癖があったといわれています。父親のジョージは、祖父の助力でウィスコンシン州のラシーンで雑貨商を開きますが、発明と文筆に熱中し商売をおろそかにしたために倒産し、一家は離散しなければなりませんでした。ポールには兄のセシルと妹のニーナ・メイがいましたが、ポール3歳の時、父親と兄と共に祖父の家（ヴァーモント州ウォリングフォード）へ引き取られ、妹は幼少のため母親と共にラシーンに残ることになりました。そしてまもなく、兄のセシルは伯母に引き取られ、ポールだけが祖父母の家に残って育てられました。このように幼少期のポールはかなりの逆境に育ったのであります。

それは1871年の暑い夏の夜のことであり、「私の意識の繊細な記録として、この光景が余りにも深く焼き付いているので、生涯消し去ることはできません。」と、ずっと後になって、彼自身はその光景を次のように回想しています。

「背の高い祖父は暖かくて力強い手で、私の堅く握りしめられたこぶしを取りながら通りを歩きました。それは厳粛な小さな行列であり、その厳粛さは夏の夜の荘厳な静寂と暗さによって、一層強調されました。我々が、快適そうに見える家のサイド・ベランダに近づくと、ドアが開いて、黒い瞳の年配の婦人が明るく灯された灯油ランプを掲げながら、優しく出迎えてくれました。後で、私は、彼女が正確には89ポンドの体重しかないことを知り、たびたび受け取った綺麗に包装された贈り物の包みのことを思い出しました。

この掛け値なしに素晴らしい人こそ、私の祖母でした。彼女は、分厚く切られた手作りのパン、ピッチャーに入った搾りたてのミルク、皿に山盛りになっているブルーベリーを、セシルと私にだしてくれ、私が夢中で食べているのを見て微笑みました。静かなひとときが我々の間に流れ、私は、即座に祖母と私がすぐに打ち解けあえるに違いないと思いました」

祖母との信頼関係はその瞬間にできあがったといわれています。この事実は対人間関係の改善を目的とするロータリーにあっては特に重要視すべき要素を持っています。人はしばしば言葉によって人間関係を改善しようとします。しかしこれは誤りであって、まず心と心のパイプをしっかりと繋ぎ、心のパイプが繋がったらその後で言葉は千差万別の形をとって、そのパイプの上に乗って相手方に伝えられるのです。心の連結がもとで、言葉はあとだということを心に銘記すべきであります。

祖母はその後、彼がアイオワ州立大学法学部に入学するまで、常にポールの良き理解者であり教

育者でありました。この祖母が育ったニューイングランド地方は、勤勉・質素・実直な生活習慣のある風土の土地で、これを知らず知らずのうちに、??????????????・祖母から身につけていたことが、ロータリー運動の根底をなす出来事となっているといって過言ではありません。彼が後に「われわれが長い年月を顧みれば、ある時には重要だと考えたことも、たいしたことではなく消え失せることが多いものである。しかしまた、それほど重要だと思わなかったもので、かえって、他のことなどはどうでもよいと思わせるほど極めて重要になるものもある。犠牲・献身・名誉・真実・誠意・愛、これらは良い旧式な家庭の素朴で高潔な特質である」と言っています。
今日でも、ロータリー運動のどこかに貴族趣味的な要素が漂っていますが、これは決して単なる貴族趣味ではなく、宗教的自由と良心の自由を求めてアメリカ東北部に移民したニューイングランド人のピューリタニズムに根ざす個人の尊厳と独立とを基調とする極めて程度の高い知性と、ニューイングランド地方の自然の厳しさに対する闘いから得た彼らの飾ることを知らぬ勤勉さをその内容としているのです。

ロータリー運動はかくして、一切の虚飾と相容れないものであり、平凡ではあっても、その日その日の生活に全力を捧げるという非常に単純な原理に基づくものであり、このことはポールの心の奥底に深く根をおろしていたのです。
祖父はジョージのために再度ウォリングフォードの近くの町に雑貨商を開いてやり、母もここに移り住み、再び一家は楽しい生活に戻り、ガイ、クロード、レジノールドの三人の弟も生まれましたが、父の持前の性格そして母の浪費癖が災いして再び倒産し、一家は離散するにいたりました。この間、兄弟のうちセシルとガイは早死にし、クロードは米西戦争で戦死してしまい、妹のニーナと弟のレジノールドの三人になってしまいます。
ポールのこの逆境の少年期にその性格形成に重要な影響を与えた人が三人いました。一人は前述の祖母のパメラであります。第二の人物は、伯母の夫の田舎医者のジョージ・フォックスです。

この人は非常に世話好きな人柄で、患者や困った人の救済に熱中するあまり、医療費の請求には目もくれなかったといわれています。人のために奉仕しようとする伯父の生活態度が、ポールの不遇の幼心にどんなに美しいこととして写し出されたことでしょうか。

宗教的迫害をうけてイギリスから逃れてきた清教徒達が、このアメリカ東海岸に安住の地を見出し、その精神を受け継いだ祖父母に育てられたことや、その環境の中で多感な少年時代を過ごしことが、ポールの心に強いピューリタニズムを植え付け、それが後のロータリーの思想の根底となったことは疑うべくもありません。
第三の人物は、名前が伝わっておりませんが、ある園芸家の存在が知られています。この人は多分ユダヤ人ではなかったかと思われますが、人生のこと、自然のことを夢のように語り伝える能力を持っていたということで、この人の影響を受けてポールはまことに格調高い美文をもって、ロータリー思想を世に説くことができるようになったのだということを初代RI事務総長チェスレイ・ペリーが述べています。

ポールは子供の頃から聡明で感じやすく、また遊びにおいては統率力をもっていたというから、その気性はかなり勝ち気であったろうと思われます。
少年時代のエピソードに次のようなものがあります。ある土曜日に友人のフェイ・スタッフォードと二人でビアマウンテンといわれる山に登ろうと思いつきました。しかしその時は冬の最中であり、またヴァーモント州のような北部では、日も短いのでそう遠くまで行くつもりはありませんでした。祖母に話せば止められるのが分かっていましたので、ちょっとハイキングに行くのだと偽って出かけてしまいました。

その日の朝はわりに良い天気でした。元気な二人は途中農家に立ち寄りました。その農家の主人がこんな日は危ないことになるから山へ登るのはやめたほうがよいと注意しました。しかしこれくらいでやめるようなやんちゃな子供達ではありません。ついに山を登っていきました。果たして天候は急変し吹雪になりました。歩くことも困難になって、午後4時頃になると全く視界が効かなくなってしまいまし

た。困った二人はやっと荒れ果てた納屋を見つけて避難しましが、雪はますます激しく道も消えてしまいました。しかし家で待っている家族の心痛を思うと、この納屋で夜を明かすこともできないと考えて、子供心に無謀にも二人は手を携えて吹雪の中へ歩き出したのでした。闇の中を迷い歩くこと数時間どうにか山を降りて、幸運にもグルフ??????????????‥ロードという知った道に辿りついて、やっと家へ戻ることができました。まさに九死に一生を得たのでした。

少年時代のポールは、いたずらが過ぎて学校から学校を転々としなければならないこともありました。まず、ヴァーモント州ラドロー市のブラック・リヴァ幼年学校に入学しましたが、気性が激しく団体訓練になじめず教師を困らせたため転校し、翌年サクストンリヴァのヴァーモント幼年学校を卒業しました。1886年には、ヴァーモント大学に入学しました。しかし、そこで学生暴力集団のリーダーに祭りあげられ、新入生に活を入れた団員の責を負い退学を命ぜられました。この事件で無実の罪であったポールは、一言も釈明しませんでした。祖父はカンカンに怒り、「馬鹿げたおこないはこれでおしまいにするんだ」と、叱りながらも家庭教師を雇って彼を教育しました。

この退学処分がポールの心に大きな変化を与えるきっかけになりました。自分の自由奔放な性格が祖父母に大きな悲しみを与え、人の信頼に応えることの重要性を深く悟ります。
彼はこの時から腕白ぶりをやめ勉強に熱中し、1888年19歳の時に名門プリンストン大学に入学しましたが、翌年祖父が他界したため、やむなく退学しなければなりませんでした。

郷里に戻ったポールは、学資を稼ぐために大理石会社の事務職員として就職しました。祖母は伯父のフォックスが引き取ります。ある程度学資もできたため、祖母と相談して大学教育を受けるためにアイオワ州立大学法学部に入学すると同時に弁護士事務所で法律実務の習得を始め、大学を卒業する時には弁護士試験にも合格していました。そしてアイオワ州立大学に行く際、当時新興都市であったシカゴに2～3日滞在し、そこで故郷ヴァーモント州では見られない都市文明の存在と、そこに営まれる現代的・物質的社会生活の実態をまのあたりに見て、彼にこの都市に対する関心が植えつけられ、これが後日シカゴで生活する心の出発点になったといわれています。

ポールを愛する祖母は、アイオワ州立大学に出発するに際して彼に人生に対する指針を与えています。「ポール、あなたは世の中の人々に大きな借りがありますよ。一人前になった今、一生懸命働いて、その借りをお返しするような立派な生活をしなければいけません」

ポールの良き理解者であり、教育者であった祖母も、大学在学中に亡くなり、両親は生きていたが頼りにならず、彼は全く孤独になってしまいます。その後両親はコロラド州デンバーに住み、母は1920年に、父は1926年にそれぞれ亡くなりました。

↑概論トップ

←BACK　NEXT ”放浪期”→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集　Ⅰ
・職業奉仕講演集　Ⅱ
・職業奉仕講演集　Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第１章

ポール・ハリスの生い立ち
(2) 放浪期

1891年にアイオワ州立大学を卒業したポールは、弁護士資格も取得していましたが、通常の人がやるように直ちに弁護士を開業することなく、もっと人生について広い経験を得るために5年間の『放浪：諸国遍歴』の旅に出ました。なぜ彼はこのような旅に出たのかについては、次の逸話が残っています。アイオワ州立大学卒業式で祝辞を述べた先輩が冗談半分で、「弁護士という職業は、人生万般のことについて深い洞察力が必要である。そのために直ちに弁護士を開業することなく、5年間くらい、諸国を遍歴し人生の機微に触れ、そして学び、いろいろな人と付合い、諸々のことを学び、その後開業すれば素晴らしい弁護士になるであろう」という趣旨のことを述べました。彼の同級生で、これを真面目にとり実行に移したのはポール一人だけでした。しかし、彼は経済的に恵まれていなかったので、生活費を各地で稼がねばなりませんでした。

最初の旅は、ロッキー山脈を越えて太平洋岸の北西部に出て、さらに南下し、カリフォルニア州サンフランシスコでは、有名な新聞サンフランシスコ・クロニクルで通信員となり、次に南カリフォルニアの農業の中心地フレズノではレーズンの箱詰工場の工員として、ロサンゼルスではロサンゼルス商科大学の講師として、コロラド州デンバーでは俳優となり多くのファンを得、ロッキー・マウンテン・ニュースの記者として、また農場のカウボーイとして、それが終わるとザ・リバブリカン新聞の記者となり、その後フロリダ州のジャクソンヴィルに移り、一流ホテルであるセント・ジェイムスの夜勤事務職員となりました。その間いろいろな職業体験だけでなく、多くの職場で友人を作ったといわれています。

その後このジャクソンヴィルで、大理石と花崗岩採掘業を経営するジョージ・クラークと出会い、彼の会社の外勤営業部員になりました。

この時より、クラークとポールの「心の付合い」が始まります。後日彼は、ジャクソンヴイルロータリークラブを創立してロータリーの拡大に大きく寄与すると共に、1911年全米ロータリークラブ副会長として会長ポールを支えるのです。
1893年3月クリーブランド大統領の就任式を見るために首都ワシントンを訪れ、ザ・ワシントン・スター紙の新聞記者の仕事をし、それが終わるとクラークの外務営業部員として、ケンタッキー、テネシー、ジョージア、ルイジアナの諸州を廻りました。
この年にも彼は死にかけるような危機に遭遇しています。ルイジアナ州のブラスの町にオレンジ摘みに雇われました。このブラスは大河ミシシッピの海にそそぐところに近い町でした。オレンジ園の持主はイタリー系のピザッチでした。彼らは河の堤と同じ高さのところに立っている同氏の倉庫を住家として働いていました。

ある日曜日、ポールは仲間の4、5人と小舟で河をわたって牡蠣を採りに出かけました。午後になって帰ってくるとき、すでに強い風が吹きだし、河を渡るのが難しいくらいでした。なんとか家に帰りつくことができましたが、あまり風が強いので、高いところに建っている倉庫では危険と思われたので、ピザッチの許しを得て、彼の家に避難しました。夜になるにつれ暴風雨はますます荒れ狂って、近所の人々も多数この家に逃げてきました。

ところが夜中、突然水が押し寄せてきました。人々はやむをえず高いところにある倉庫へ逃げました。ポールも8歳ぐらいの少女を一人肩にのせて、胸まで水に浸かりながら倉庫に避難しました。朝になって、暴風雨は去りましたが、見渡す限り立ち残っていたのは誠実な大工の建てたこの倉庫とピザッチの家だけでした。この1983年のハリケーンは激しいもので、ある島では住民全員が流されてしまい、このブラスの町でも多くの人の命が奪われてしまいました。ポールはこのときも危うく難を免れたのでした。

この頃、ポールの頭にイギリスを訪れるというアイディアが浮かんできました。それを実行するために、ジョージ・クラークの会社を辞職しました。第1回目のイギリス行は家畜運搬船の水夫として大西洋を渡りましたが、積荷を降ろすと直行で帰国してしまいました。そのためポールは大変失望して、再び渡英を企画して資金作りをし、出発しました。今度は十分ロンドンを見物することができたばかりか、その帰りにウエールズ地方を見物することができたのです。
アメリカに帰国後、すぐ1893年にシカゴで開かれた万国博覧会を見物し、博覧会の規模の大きさと全世界からの出品から強い印象を受けました。何かの因縁か、日本のロータリーの生みの親米山梅吉と、後の大阪ロータリークラブの土屋元作（号して大夢）もこの博覧会の日本館で通訳をしていたということです。万国博覧会の後、西部のニューオリンズ訪問を計画し、市内で職を求めようとしたが職にありつけず困っていた時に、心の友ジョージ・クラークのことが頭に浮かび、ジャクソンヴィルに向かいました。クラークはポールの訪問を喜び、再び同社の大理石販売員として採用し、アメリカ南部諸州を訪れさせ、キューバやパナマ諸島まで足を延ばさせたといわれています。そしてこの旅行が終わるとクラークは、他にどこか行きたいところはないかと尋ねた時、ヨーロッパに行きたいと答えたので、直ちにクラーク大理石会社代理人に任命され、スコットランド、ベルギー、イタリア、スイス、オーストリア、ドイツ、オランダの諸国を漫遊することができました。
このように諸地方への長期間にわたっての旅行は、若い法律家に対して強い印象を与え、彼はそこで人類というものがその伝統と慣習の相違からさまざまな思索と制度とをもつものであるにもかかわらず、その根本は善意と友愛に支えられていることを知ったのです。この彼の生活経験と理解とが、無意識にではあったがロータリー運動が国境を越え全世界に受け入れられる基盤を作り上げたということができるでしょう。

このようにして、5年間の放浪生活を終えようとしていたポールは、弁護士開業のためクラークに辞職を申し出ました。クラークはポールの人柄を惜しみ、「ここで一緒に仕事をすれば金を儲けることができるはずだ」と引き留めようとしたが、ポールは、「そうかもしれませんが、私はシカゴに金儲けのために行くのではありません。人生を生きるために行くのです」と答えたのです。ポールの気性をよく知っているクラークは、「では最後にどこか行ってみたいところはないか」と聞いたところ、ポールは、「ニューヨークへ行きたい」と答えました。クラークは、「では決まった。ニューヨークに出張を命ずる」と言いました。「心の友なるかな、クラーク、まこと雅量と温情あふるる友なりき」と、ポールの自伝「ロータリーと我が生涯」に記されています。
1892年アイオワ州立大学を卒業してから、シカゴに落ちつくまでの5年間、ポールは遍歴を続けましたが、どんな場合にも無賃乗車などをしたことはありませんでした。彼はどんなに未知の都市に行っても、到着早々に独立の生計をたてる職に就く技量をもっていました。彼を知る友人は、それを「奇異の才をもつ男」「不思議な能力をもつ男」と呼んでいました。
「ポールの行くところ、なぜ必ず職にありつけるのか？」の問いに、次のように簡単に答えています。
「常に服装を整えて身辺によく注意の行き届いていること、精神労働であれ、肉体労働であれ、与えられた職務に全力を尽くすことを常に忘れず働くことを目標にする」

彼の漫遊中、いたるところで笑いを誘発し、歩々清風をおこすといわれています。アメリカ全土に心の友を得、後にクラブ拡大の時にその成果が現れるのであります。

ポールはシカゴへ来て後、当時あったプレイリークラブの会員となりました。このクラブはハイキングを目的とする社交クラブのようなものでした。ある日ハイキングに加わった時、ポールの服の破れたの

を見つけて繕ってくれた優しいスコットランド娘のジーン・トンプソンと知り合いになり、互いに愛するようになって、1910年結婚したのです。
ポールはシカゴ郊外にあるロッグウッドドライブの景色が、幼い時を過ごしたウォリングフォードの谷に似ているのを愛してここに家を建て、この家をカムリーバンクと名付けました。これは妻ジーンが若い時住んでいたエジンバラの街の名前を取ったものでした。彼らはここに35年間住みました。

訪れたロータリアンも数多く、ハリス夫妻の歓待を楽しんだのです。また、奇しくも彼らの隣人はロータリー創始者の1人、シルベスター・シールでした。

↑概論トップ

←BACK"(1)幼年期～学生時代"

NEXT "ロータリー誕生"→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集 Ⅰ
・職業奉仕講演集 Ⅱ
・職業奉仕講演集 Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第2章

ロータリー誕生

ポール・ハリスは、5年間の諸国遍歴が終わり、シカゴの町に移り住んだのが1896年でした。早速弁護士を開業いたしましたが、5年間の空白があったため、友達の弁護士の下請の仕事を頼んでさせてもらったり、そのかたわら判例を勉強するために図書館通いをしながら、ようやく経済的な安定が得られるようになったのは2年経った1898年でありました。

そこでポール・ハリスはふっと一息つきシカゴの街を見まわした時、シカゴの街もアメリカ全土が相遇している共通の悩みを持っていることが分かりました。それは南北戦争が終わり工業化の波が全米に押し寄せ、農業社会から工業社会へと産業構造の変革の時代であり、農村部から都市部への人の流入が激しく、各都市とも都市計画が追いつかず、都市機能が麻痺し混乱をきわめ、自分のことしか考えないという風潮が高まり、人の心は全く渇ききっていました。

その頃、全米のあちこちで、都市生活を自分達の手に取り戻そうとする住民運動が起こってきました。日本でいうところのコミュニティ運動に類する社会改良運動です。この運動はコミュニケーションのある社会を造ろうとする運動で、心と心が通いあわない都市生活なんて無味乾燥であり、倫理の確立などは到底およびもつきません。およそ人間と言うものは、一人では生きていくことなどできるものではありません。世の中にコミュニケーションなくしては社会の構成など絶対にできないと考えられます。

ポール・ハリスはそのような社会改良運動もさることながら、一番ひどいのは職業人の心の問題ではないかと考えました。そこでシカゴに住む全職業人の心と心を通わせる方法が何かないものかと考えました。しかしながらあまりにも問題が大き過ぎることに気がつき、一弁護士の力ではどうしようもないとあきらめ自重します。

そうこうしているうちに、ある一つの場面に遭遇します。それは1900年の夏のことでした。シカゴ郊外の弁護士の友人の別荘に招かれ、夕食後友人にともなわれ、食後二人は連れだって付近の街頭を散歩しました。その道々、二人はいろいろな商店や事務所を訪問し、その都度ポールはこの友人から各店の主人を紹介されました。そして、友人の依頼者のグループの集まりに加わります。もちろん友人と依頼者はよく知り合っておりますが、依頼人同士はあまり逢ったこともない人たちです。しかしいろいろと話をしているうちに依頼者同士が非常に打ち解けて仲良くやっているのにヒントを得て、これは一体どうしたことだろうと考えた時に、その中に同業者が入っていないということに気がつきました。そうだこれだとポールは合点します。

いうまでもなく資本主義社会にあっては自由競争がたてまえであり、同業者というものはお互いに業界の中では良いところ、悪いところ、醜いところ全て知りつくし、喰うか喰われるかのしれつな闘いをしているため、どうしても心を開こうとはしません。そこで同業者を排除して、一つの職業から一人づつ集まって気楽なクラブを作ってはどうか、そうすることによってそれぞれの職業人が心を開き仲良くやっていけるのではないかと考えつきます。その後ポールはあわてず、約5年の歳月をかけ思索を練ります。

1905年 2月23日木曜日の夜は、ミシガン湖から吹き付ける、小雪まじりの身を切るような寒風が吹き荒んでいました。ポール?・ハリスはマダム・ガリの店で、彼の顧客でもあるシルベスター・シールと夕食を摂りながらに、兼ねてから話していたロータリークラブ結成の構想を具体的に説明しました。
「私は実業家のクラブについて、ずっと考え続けてきました。それは、シカゴにある今までの社交団体とはまったく違った、新しい種類のものなのです」
「それは、どのように違って、どんな意味を持つクラブなのですか？」
シールは尋ねました。
「そうですね。知己と友情を充分に強調したいですね。しかし、それだけではなく、会員同士がお互いのビジネスを伸ばせたらいいと思います。それは難しいはずはないと思うのですが」
「例えば、二人の会員が同じ職業を持つことができないと決めればいいでしょう。そうすれば、クラブの中には競争相手がなくなります。もし会員の誰かが品物やサービスが欲しい時には、クラブ内の人と取引する義務を持たせたらいいでしょう。相互扶助の一種だけれど、どう思います？」

ポールの構想に全面的に賛同したシールは、共に、シカゴ市ディアボーン街127 N.ユニティビル 711号室にあるガスターバス・ローアの事務所に赴き、既にその場で待機していたローア、ハイラム・ショーレイと共に、ロータリークラブ設立のための初の会合が開かれたのです。

友人たちを見て微笑んでいたポールは、突然、緊張した面もちになって話し始めました。
「ハイラム君。君は我々の新しいクラブの中で、仕立て屋という職業を持っています。私は弁護士です。それぞれのメンバーは自分自身の職業を持っているのですから、我々はお互いに、自分の職業を活かした取り引きをしてはどうでしょう」

この日の会合では、「一人一業種で親睦を深める会を作る」という設立の主旨が熱っぽく語り合われ、クラブには実業人だけではなく法律家、医師、宗教家と、あらゆる職業の人を集めることになりました。

この1905年2月23日をロータリーの創立記念日としています。

職業人というものは、資本主義社会の基本前提である自由競争のもとで、互いに相競うことを義務づけられています。相競うことがゆえに互いに疑心暗鬼と不信感にさいなまれている職業人に、親睦和合を達成させるためには「一業一会員制」が重要なことでした。そしてこの会の実質上の目的を、会員間の「職業上の相互扶助」、つまりそれぞれの会員の職業を理解しあい、その企業上の諸問題に会員相互の衆知を集めて助け合うということにおきました。このようにして、会員相互の職業上の相互扶助を目的とする親睦団体たるロータリー・クラブの基本構想がまとまり、そしてさらに2週間後にポールの事務所で開くことと会員を増やすことを約束して散会します。この会合は、互いの個人的経験談によって、大いに活気あるものとなりました。
3月9日第2回目の会合がポールの事務所で、新たに不動産屋ウイリアム・ジェンスン、印刷屋ハリー・ラグルスが参加して開かれました。

事業の経営者、共同経営者、または会社役員でなければ会員になれないことが決められ、更に、今後の会合の持ち方についても議論が闘わされました。
「個々の会員の事務所で代わる代わる例会をしたらどうだろう？」
ハリスはそう提案しました。
「その方法なら、我々それぞれはすぐお互いの職業に対する詳しい知識がつくはずです。持ち回りという取り決め事はすばらしいことだと思います」

その考え方は貴重な意見だったので、満場一致で採用されました。このようにして会員相互の職業を十分に理解しあうために、例会場を各会員の職場を順番に持ち廻りしながら輪番で開催することに決定しました。
第3回目の会合は3月23日にシルヴェスター・シールの石炭置場で開かれ、洗濯屋アーサー・アーウィ

ン、オルガン製造業者アル・ホワイト、保険業者チャールズ・A・ニュートンが入会し会員数9人になりました。ポールは会員数を25人くらいまで増やしてから発足したかったのですが、時期を失すると考え9人でクラブ発足に踏み切り、役員の任命をおこないました。

この会は、ポールが中心になって進めてきましたので、彼が会長になってもなんら不思議はないのですが、互譲の精神が必要であると考え、シルヴェスターを会長に推薦します。彼はこころよく引き受けました。
シールの会社で会合を開いたことを記念して、ポールの指名によって初代会長にシルベスター・シールが就任したことは、実質的な主宰者であるポールの謙虚な人柄が忍ばれると共に、依頼されたことは、どんなことでも快く引き受けるというロータリーの伝統として、現在に引き継がれています。

会長挨拶を兼ねて石炭業界の展望についてと題して、今日でいうイニシエーションスピーチの第1号をします。

イニシエーションとは、新人受け入れ、入会式の意味です。クラブの性格上、自分の職業における自らの職業観、経営観、経営哲学、経営上のノウハウを他人に開陳して、お互いの発想の交換をするという趣旨から、特に当を得たスピーチであったと思われます。次に幹事の選出にあたり、通信担当幹事と統計担当幹事の二幹事制にします。前者は、ハイラム・ショーレイ、後者はウイリアム・ジェンスン、そして会計にハリー・ラグルスが選ばれます。

当時はまだSAAの制度はなく、定款も1906年に作成されます。しかしこの会で、例会で一番重要なことが決められています。それは、例会出席強制の原則です。このクラブは2週間に1回例会が開かれます。厳しい経済情勢の中で、お互いに助け合い、親類付合いし、隆々として栄えるクラブを作ろうと誓い合ったのだから、必ず毎例会に出席して互いに安否を気遣い、幸せを祈ろうとしました。

1、2回の欠席はやむをえないとして、4回連続欠席すると自動的に会員資格を喪失することが決定します。これには一切の例外も認めないと定められています。それほど初期のシカゴクラブの人は例会出席を絶対視したのです。
このシカゴクラブの初期の活動に参加したものの中には、今日のように大学出身者はおらず、大多数は農村出身の中堅企業の経営者であり、財力には乏しくとも倫理的に正しい道を歩もうとする、いわゆる社会の優良分子だけだったといわれています。ちなみに、シルヴェスター・シールはインディアナ州、ガスタヴァス・ローアはイリノイ州のカーリンビールから、ハイラム・ショーレイはメイン州の出身でした。

↑概論トップ

←BACK"(2)放浪期"　　NEXT "ロータリークラブ名とバッジ制定 "→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集　Ⅰ
・職業奉仕講演集　Ⅱ
・職業奉仕講演集　Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第3章

ロータリークラブ名とバッジ制定

1905年3月23日、第3回目の会合で役員が任命され、次いでクラブ名の討議に入り、議論が沸騰します。

彼らは、当初自身たちのことをブースタークラブBooster Club（推進者）と呼ぶことを考えつきました。
「ブースター？　電圧の上昇？」
「辞書はその意味を、前進を助けるために、下から持ち上げるか押し上げると解説している。悪くない！現在のアメリカのはやり言葉だ。どんな都市にも、どんな小さな町にも、大学や高校は、ブースター組織を持ち、その数は少なくとも20以上はあるだろう」

しかし、思慮深い考えが、ハリスとシールに、その名前をクラブにつけることを思い留まらせました。我々はシカゴを押し上げることに関心があるのではないし、いわんやこのクラブを押し上げることでもないことを指摘しました。すでに、そのような義務をもっている商工会議所chamber of commerceという特別な組織ができていると、ポールは説明しました。クラブの会員の望みは、世間の注目をあびている彼ら自身を“押し上げる”ことではないのか。彼らが望んでいるのは、相互取引によってより多くの金を稼ぎ、毎週の例会でささやかな楽しみを持つことでありました。

ラウンド・テーブル・クラブthe Round Table Clubはどうだろうと、誰かが提案しました。これもまた悪くはない。アーサー王の円卓会議は、重要な人が参加することで有名であり高貴でもあった。しかし、その名前には新鮮味がなかったし、新しい国の生き生きした都市には、まったくふさわしくなかったし皆もそう思いました。
ポール・ハリス自身は、クラブに対する彼の考えを率直に言い出してくれたことに感謝の念をいだきました。
「コンスピレーターズ・クラブ（共謀者）the Conspirators Clubと呼んだらどうだろう？」
長時間、誰も一言も発しなかった。彼らはその名前のことを考えて座っていました。ついに、たまり兼ねた一人が尋ねました。
「なぜ　共謀者なんだい？　我々は何を共謀しようとしているのかい？その言葉は、普通、あまり良くない行為を意味すると思うんだが」

ポールは必ずしも、そういうふうには考えなかったけれども、言外の意味が、本来の趣旨を混乱させるかもしれないと考え、その意見に賛成し、提案は却下されました。①ブースタークラブBooster Club ②ラウンド・テーブル・クラブThe Round Table Club ③コンスピレーターズ・クラブConspirators Club ④シカゴ・フェローシップThe Chicago Fellowship ⑤ブルー・ボーイズBlue Boys ⑥シカゴ・サークルChicago Circle ⑦レイク・クラブThe Lake Club ⑧FFFクラブThe FFF（Food-Fun-Fellowship）Club ⑨メン・ウイズ・フレンドMen with Friends ⑩フレンズ・イン・ビジネスFriends in Business ⑪トレードアンドトーク・クラブTrade and Talk Club ⑫ウインディ・シティ・ラウンドWindy City Round 等々、結局1ダースを超える候補名が卓上を賑わしましたが、ビシッと決めるような発言をする人は誰もいませんでした。

最後に誰かが「我々はお互いの事務所で、一種のローテーションを取り決めて、会合を開いている。

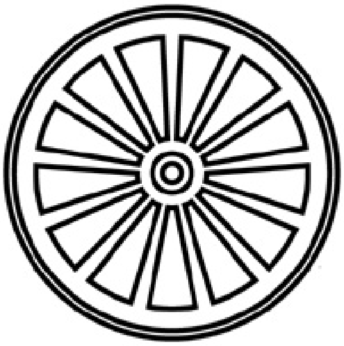
ロータリークラブRotary Clubと呼んだらどうだろう」

この論争で彼らは疲れはて、誰いうとなく例会場も持ち回り、役員も持ち回りであるからRotary Clubになったといわれています。しかしポール・ハリスは「ロータリーの理想と友愛」で、ロータリーという言葉を初めて使ったのは初代会長シルヴェスター・シールであると述べています。

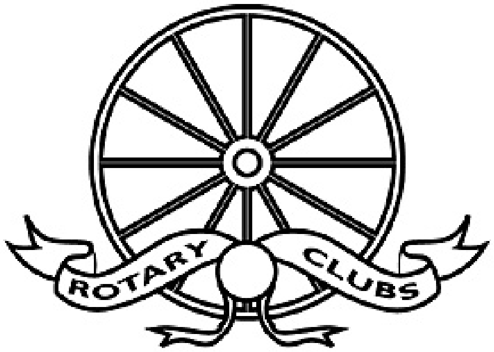
この会合の頃、同時にバッジの制定の動きがありました。最初の紋章はハリー・ラグルスが作りました。彼が会社でロータリーの紋章を考えていると馬車の新聞広告が目に留まり、例会場の持ち回り、物と思想の伝達手段の馬車を結びつけ、13本の支柱からなる馬車の車輪を紋章としました。

だが、紋章に動きがないことや馬車の車輪で品がないなど批判が出て、ポールが会員のモンダギューベアに改良を依頼しました。1906年のことです。彼は軽快で上品な二頭立ての馬車の車輪を作ろうと、14本の細い支柱よりなる華奢な車輪を作り、その上にRotary clubと書き、その下に運動を示すために雲をつけました。これもシカゴクラブの会員間で極めて不評で、有名な幻燈機製作者ロンド・トム・フィップが、雲は塵に見えるし塵が車輪の後に見えるのは良いが前方に見えるのは不合理であるなどと非難したので、早速改正し同じ年度中に、12本の支柱よりなるさらに軽快な馬車の車輪の下半分にリボン、その周囲に雲をつけ、リボンの中にRotary clubと書き車輪の中の下にChicagoと書きました。これが1910年全米ロータリー連合会ができる時までのシカゴクラブの紋章となりました。

1908年以降、全米各地にロータリークラブができましたが、各クラブ独自の紋章を用いていました。したがって第1回全米ロータリー連合会の大会がシカゴで開かれたとき、16のクラブがあり16の紋章がありました。中には歯車を使った紋章もありました。

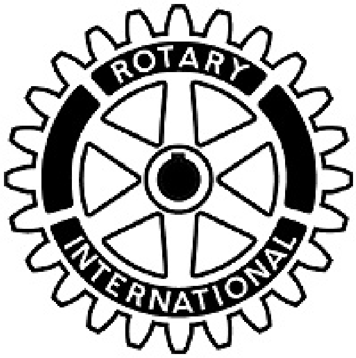


1906年



1910年

1913年



1926年

↑概論トップ

←BACK”ロータリー誕生”

NEXT ”初期ロータリークラブ例会”→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集　Ⅰ
・職業奉仕講演集　Ⅱ
・職業奉仕講演集　Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第5章

一般奉仕概念の誕生

シカゴクラブの定款細則が定められたのは、1906年1月のことでした。その起草委員に任命されたのがポール・ハリスとマックス・ウォルフの2人の法律家と、いま1人は保険業のチャールズ・A・ニュートンでした。この3人の作業は非常に優れていて、その表現は今日のものにもその痕跡を残しています。そして綱領として次の2ヶ条が記されています。

第1条 会員の業務上の利益を振興すること。
第2条 性質として社交クラブに伴う親睦、その他望ましい諸点を振興すること。

要約すると会員の相互扶助と親睦が目的です。社交クラブである以上、親睦が共通した性格ですから、ロータリークラブの特質は会員の相互扶助にあるといってよいでしょう。これをロータリーの互恵主義と呼んでる人もいます。

では会員の相互扶助（互恵主義）とは一体どういうことでしょうか。具体的にいいますと、会員相互の取引を義務づけているものです。会員が石炭を買いたいなら、シルヴェスター・シールから買い、洋服を仕立てたいならハイラム・ショーレイに注文する。書類を印刷したい時は、ハリー・ラグルスに、法律問題であれば、ポール・ハリスにといった具合に、全てのものに相互扶助を義務づけたのです。そして会員同士は常に親睦を保ち、良きにつけ悪しきにつけ親類付合いなので、全て原価取引を原則としておこなわれたといいます。ある時、初期の会員が会費が高いのではないかと不平をいったところ、ポールはこの原価取引のためにあがる利益のほうが多いはずだと笑ったという有名なエピソードがあります。

このように初期のロータリークラブは、クラブを通じて互いに儲けよという非常にエゴイズムに満ちた出発でした。しかも、1906年からスタティスティシアン（Statistician）統計作成担当と呼ばれる役員がおかれ、毎例会ごとに、それまでの会員間の具体的な取引の記録を作成し、報告がなされたということです。この役職は1909年から、会員名簿を保持し会員出席を記録するレジストラー（Registrar）出席委員長と兼務になり、1912年に廃止されます。

重要事項……

毎回の食事の数を確定し、会員相互で取引されたビジネスの量を確認する必要があるので、この郵便物を直ちに返送すること。
あなたが取引したビジネスを立証する記録をつけて、その会員の名前をしめした記録を大切に保管しておくこと。

次回の例会に参加しますか　（は　い）（同伴者数）
（いいえ）

会　員　報　告

前回の例会以降、

私は　人の会員から　件の取引を受け取った

私は　人の会員について　件の取引に影響を与えた。

私は　人の会員に　件の取引を与えた。

日　付　　　　　　　　　　　署　名

会員相互で商品や原材料を原価で取引して、それを一般の人に売って大きな利潤をあげるのですから、こんな効率的な話はありません。この制度は会員の事業に大きな経済効果を生みだし、零細な企業主でもロータリークラブに入会すれば必ず事業は拡大し、大金持ちになれるとさえいわれました。

ポール・ハリスは、会費が高いことに不平を洩らす会員に、原価取引で得られる利潤を考えれば決して高い会費とはいえないと諭じながらも、シカゴ・クラブの［物質的互恵］制度への非難に対して、後日、次のように弁明しています。

「初期のロータリーの目的は利己であったとしばしばいわれる。或いは、その通りであったかもしれない。しかし、今までの人生の中で最も人を思いやり、自己を滅却できたのは、1905年、シカゴ・クラブの会員であった日々だと述懐する人もいる。会員が利己か利他かの判断は、何によって幸せを見付けだすかによって決まる。もし、会員が自分の利益を図ることに幸せを見いだしていたとすれば、利己主義であり、反対に、友人を助けることだとすれば、それは利他である。シカゴ・クラブの初期の段階に、この両方の考え方があったとしても、それは至極当然のことであろう」（This Rotarian Age）

そういう中で、ロータリアンはどんどん金持ちになっていきました。そしていろいろな商売上の情報の交換をやっていたのでますます企業が発展していきました。

身勝手なことがいつまでも続く道理もなく、こうした行為に対する一般の人からの非難が日に日に高まり、ロータリアン自身からも批判が出始めてきました。1906年4月に、ドナルド・カーター事件が起こりました。フレデリック・トゥイード Frederick Tweedが、弁理士ドナルド・カーター Donald Carterに［物質的互恵］の特典を説明して、シカゴ・クラブへの入会を薦めたとき、彼は職業を持って社会で生活している以上、職業を通じて社会に貢献することが自分が存在する証になるのであって、自分たちだけの利益にこだわって、社会的に何もしない団体に将来性も魅力もないと述べ、入会を断ったのです。

最初の4人のロータリアンは決してエリートな人ではありません。単なる町の人でした。そういう町の人が集まってロータリークラブを作り、その中で情報交換をおこない、そしてどんどん伸びていき、やがてエリートと呼ばれる集団にまで成長していきました。その中で、いろいろな反省が生まれてきます。外部からの批判も出てきます。ロータリー内部からの自己批判も出てきます。一番有名なのが、ドナルド・カーター事件です。1906年の春、シカゴクラブのフレデェリック・ツィードから入会を勧められた彼は、親睦、相互扶助の原理を聞き、「大変結構な話だが、ロータリーに入っている君たちだけが栄え、会員皆幸せになっていいだろうが、一業一会員制だからロータリーに入れない人はどうなるのだ。ロータリーに関係のない一般市民はどうなるのだ。地域社会に育てられ、お世話になり、何のお返しもなしにこの世を去るのはあまりにもエゴイズム過ぎるのではないか。自分だけがいいことをしようという集団には将来性がない。今生きているのはシカゴで自分が社会的に何をしたかという証を示したいから生きているのだ。それを示せないようなクラブには絶対に入らない」と言って入会を断りました。

その頃にはロータリークラブに入ったら金儲けになるという定説がありましたから、皆が争ってロータリーの会員になりたがっていました。それを断ったのですから、シカゴクラブの受けたショックはさぞ大きかったろうと思われます。

この入会拒否事件はシカゴ・クラブに少なからぬショックを与えましたが、この事件の処理に対するフレデリック・トゥイードとポール・ハリスの対応は極めて適切であり、その適切さが後のロータリーの発展につながっていきます。

「せっかく仲間にしてやろうと言っているのに、断るなんて失礼だ。今後二度と声をかけない」俗人ならきっと、そう思ったに違いないし、二度と彼を誘うこともなかったでしょう。しかし、[物質的互恵]と[親睦]にのみ終始することに限界を感じ、次の段階へのステップ・アップを考えていたポール・ハリスは、この事件を絶好のチャンスと捉えて、直ちに、ロータリーの在り方を転換することを決断し、定款を改正することを条件にドナルド・カーターに再考を促し、彼も快く入会を了承しました。

これを契機に、シカゴ・クラブの定款に対社会的な行動に関する項目が付け加えられ、始めて、原始ロータリーに奉仕という概念が芽生えることになります。

そして綱領第3条が追加されました。

第3条 シカゴ市の利益を推進し、その市民の中に市民としての誇りと忠誠心を植えつけること。

カーターの考え方は、ロータリー内部でも感じられており、議論が高まり、1912年に物質的相互扶助の原則が廃止されました。この理論的根拠は1915年、ガイガンディガーのロータリー通解に「ロータリアン同士の取引はロータリーの義務でも本質でもない。またロータリーの存在理由でもない。ロータリアン同士の取引はロータリーの付随的要素に過ぎないものである」と提示されました。

またカーターは世のため、人のためのクラブであればシカゴ市だけでなく、全米の諸都市にもと考え、ロータリークラブの拡大理論を提唱しました。しかし従来と違う概念ですから問題にならないわけがありません。元来、親睦と奉仕は水と油の関係で相容れない性質です。内に向かうエネルギーと外に向かうエネルギーです。

シカゴクラブの人たちは親睦と相互扶助だけの考え方で集まっていましたので、何をいまさら世のため人のために奉仕するのかといって、クラブは親睦派と奉仕派に分かれます。しかしポール・ハリスはカーターの考え方が正しく、ロータリークラブはエゴイズムの塊であってはならず、世のため人のためになるクラブでなければ永続性も将来性もまた社会的意義もないと考え、奉仕の考え方を推進する決意をします。

1907年3代目会長に就任したポールハリスは、3つの新しい方針を立てました。

①奉仕理念の提唱
②シカゴクラブの現状打開とクラブの充実
③拡大に向かって準備をすること

ここで初めて「奉仕」という言葉が登場しますが、この当時はまだ、今でいうロータリーの奉仕の概念はなく、ただ漠然とした対社会的な奉仕の概念しかありませんでした。今でいうロータリーの奉仕の概念が明示されたのは1908年のことです。初めはチラッとした奉仕で、例会場に新聞少年を連れてきて新聞を買ってやったり、施しをするといったいわゆるチャリティーのような奉仕でした。それがだんだんとボランティアに変わっていきます。

シカゴクラブがおこなった公衆便所の設置運動というのが一番有名です。シカゴ市内に公衆便所を設置する運動を提唱し、地域社会の諸団体やシカゴ市議会を動かし、3年の歳月を費やしてこれを成功させました。しかしこの運動も何かしら、対社会的な奉仕をおこなおうとしている中にたまたまこの話が出て、おこなっただけのことであると理解する方がよいのではないかと思われます。

さてポール・ハリスが会長に就任し、自ら先頭に立ち、奉仕理念の提唱を推進していくにつれ、シカゴクラブはますます荒れだします。親睦と相互扶助しか考えていなかった会員ばかりの中で、奉仕の考え方を推し進めていくことによってクラブ内に混乱が起こり、収拾がつかないような事態に立ちいたったのです。

ポール・ハリスは何の目的も達成することなく会長の任期がきます。しかしここでポール・ハリスは重大な過ちを犯します。会長留任を主張し第4代目の会長になったことです。シカゴクラブの現在までの歴史の中で、自ら会長留任をしたのはポール・ハリスただ一人です。いうまでもなく、会長は1年で交替するのが原則です。幹事の留任は今までに多くの例があります。

1910年にできたフィラデルフィアクラブでは1960年、創立50周年の記念祝賀会のメインイベントが幹事留任50周年慰労祝賀会であったといわれています。また日本でも大阪の露口四郎は幹事留任13年、軍閥の弾圧で壊滅し、戦時中も大阪金曜会と名をかえて、ロータリー運動を展開し、1949年（昭和24年）RIに復帰するまでの期間を合わせると、通算20余年間幹事職を続けたといわれています。他にも幹事留任の例は多く見られますが、自ら自薦して会長留任をしたのはポール・ハリスただ一人です。

1908年ますます荒れてきますが、この年にロータリー運動形成上重要な人物が二人入会します。その一人は、アーサー・フレデリック・シェルドンです。彼はミシガン学派の経営哲学であり販売学の大家でもあります。ミシガン学派の経営哲学理論というのは、今は多数派となりその流れを汲む人が多いといわれていますが、当時は少数派で、仏教的な因縁論で割り切る経営理論です。

企業というものは、もろもろの人的な因縁でもって構成されています。すなわち株主、役員、従業員、買手、その他多くの因縁でもって集まった人々により構成され、いろいろな因縁に基づいて企業経営活動がおこなわれ、その結果利潤を生み出すのです。その利潤は因縁でもって集まった人々によってもたらされたのであるから、その利潤を生み出した人々に還元するという理論です。これは現在のロータリーの職業奉仕理論と合致する考え方であります。このような理論を開発したのがシェルドンです。彼は非常な秀才ですが、人間関係をあたためるということが下手な人です。いつも人を見ずに法を説いたといわれています。しかしポール・ハリスは、世のため人のためという奉仕理論と相通ずるところがあり、彼の経営哲学理論が大いに役に立ち、肝胆相照らす仲となり、二人で奉仕という理念を推し進めていくのです。

今一人は、同年同月に入会したチェスレイ・ペリーです。彼は組織管理にたけた人であって、大学は出ておりませんでしたが、米西戦争に陸軍士官として参加した経歴の持ち主であります。このように同年同月に片や経営哲学の大家、片や組織管理の大家の二人が入会してきたということはロータリーにとって大変幸せなことだといわねばなりません。

後年、ポール・ハリスはチェスレイ・ペリーを評して、私はロータリーのデザイナーだが、本当のロータリーのビルダーは彼であるといったということです。100年近くなるロータリーの歴史を見、2001年6月30日現在世界中に30,149のロータリークラブと1,188,492人のロータリアンを擁する巨大な組織になったもとになる組織原理を開発したのがこのチェスレイ・ペリーでした。

ここでシェルドンについてもう少し触れておきます。シェルドンはミシガン大学経営学部卒の優秀な販売学の大家でした。彼は学んだ経営理論の正当性を信じて、これを実践するためにシカゴの町にやってきます。初めは本屋に勤めますが、その経営主のあまりに利己的な経営に嫌気がさし退社します。その後いろいろと紆余曲折した末、販売学を教える学校を設立します。その資格でシカゴクラブに入会が認められ会員となります。

時あたかもシカゴクラブは、親睦派と奉仕派に分かれてクラブ存立の危機をはらんでいた時代でした。シェルドンはミシガン大学で学んだ経営理論である「奉仕哲学」をクラブに持ちこみます。そのミシガン大学で開発された奉仕哲学とは、20世紀初頭、当時の社会の特長である商品交換を中心とする物流機構の確立と、その主要な担い手が商人階層にあるところから、商人の社会管理のやり方如何によっては、現在社会は後世に拭い去ることのできない汚点を残しかねない危険性をはらんでいることを指摘し、その解決策として、商人の経営管理の場に「利己と利他との調和」を中核とする一つの哲学理論の導入が必要であると考えました。商人は利潤なくして自己の企業を成り立たせることはできない。利潤獲得に名をかりて儲けのためなら手段を選ばないということになれば、社会がいかに醜いものになるかは誰にでも分かることです。

そこで商取引というものは、売手・買手双方の満足なくしては成り立つものでないということと、長期的に商売が成り立つためには、売手・買手の間に信用と呼ばれる信頼関係が確立されることが肝要で、長期的に安定した利潤を上げることは、この信用確立という精神的境地と表裏一体の関係にあると考えられます。

すなわち利己と利他との調和こそが、商人と顧客との間の関係を規律する偉大な原則であると断定できます。この時商人も利益を得て物心両面の幸せを得ますが、それと同時に顧客もまたその商人と取引して満足いく商品を得て物心両面の幸せを得ることができます。いわゆる利己と利他との調和が保たれたのです。これがミシガン大学経営学部が形成した概念であって、これを「奉仕の心」Ideal of Serviceと呼んでいます。言い換えれば、利己と利他とを調和せしむべき心の場のことを「奉仕」と呼んでいたのです。このミシガン大学経営学部の開発された「奉仕」という専門的、学理的、且つ文化的概念がシェルドンのシカゴクラブ入会でロータリーの世界に影響を及ぼしていくのです。

シェルドンはシカゴクラブに入会して、そのクラブがおこなっている親睦と相互扶助、そして今では親睦と、精神的相互扶助にまで発展したこの考え方と、ミシガン大学で学んだ相手の身になって考えようとする「利己と利他の調和」を主軸とする奉仕概念が、一致するものと考えます。そしてこの考え方を、当時ポール・ハリスが提唱していた「われら少数の職業人の親睦のエネルギーをあげて世のため人のために」という発想の原理的基盤におくべきであると考え、ポールに進言します。ポールは大いに歓迎し感動します。

この時以降二人は1920年頃まで互いに協力してロータリー運動の原理的基盤の確立の努力を重ねていきます。
ここでもう一度、シェルドンの考え方を整理しておきます。「利己と利他との調和」を、一体どうすればよいのかという大問題があります。第一に、シェルドンは、「利己と利他との調和＝奉仕」の立場にあります。第二に、この時のみ私的利潤の獲得が、同時に対社会的貢献と合致することになります。

こうして第三に、商業は金銭獲得の即物性を取得できます。即ち「利己と利他との調和＝奉仕」の考え方に基づき自分の企業管理をする場合のみ、自己の企業の発展と地域社会の開発を調和させることができます。この奉仕の哲学を日常生活で実践する商人達は、自己の努力の結果である良質な利潤に支えられ、地域社会の住民達から尊敬と信頼を受け、誇りを持って後世にその商的文化伝統を伝えることができるものと彼は考えました。

そして彼が、「利己と利他との調和＝奉仕」の解決策として見いだしたのがシカゴクラブの親睦でした。単なる社交クラブの親睦と相互扶助から、親睦の根底にある友愛心が物質的な相互扶助にとどまらず、精神的な相互扶助へと深まっていったところに着目したシェルドンは、原理実現のためにロータリークラブの制度の原理的手直しをおこないます。
第一に、彼は職業分類学の力を借りて、職業分類表を作り、その地域の商的社会の横断面を捕らえ、各職種につき良質な人すなわち「利己と利他との調和＝奉仕」の志を持った職業人を選び会員と

します。
第二に、職業体験が異なった良質な会員が、その独自な職業的発想を定例例会において相互に交換することにより、自己研鑽し、人格の向上を計り、企業の道徳的水準を高め、その修錬を積むことによって天地の理法が見え、やがて会員一人一人が「利己と利他との調和＝奉仕」の精神的世界の体現に到達することができると考えたのです。
この時ロータリークラブは、他の団体では果たすことのできない独自の社会的使命、機能を自覚するようになりました。その会員の親睦を出会いの場とする「奉仕の心」に向けての絶えざる努力が、企業管理の体質改善になって現れ、それが徐々に、自己の私的利潤獲得の方法を改善するとともに、自由競争の場である業界において提示されることを通じて、業界浄化の先例となったのです。

そして彼はこのロータリー思想を日常実践の場において企業経営者の心に訴えるように“He profits most who serves best″ と表現しました。このシェルドンの標語が発表されたのは、1911年第2回全米ロータリー連合会のポートランド大会です。このシェルドンの立論はその立場の崇高性と理論の整合性と後世に対する始動力の強さからして卓抜したものであり、これを理解することなしに、ロータリー運動の独自性を示すものだとされる「職業奉仕」の概念を理解することはできません。

当初シェルドンは、“He profits most who serves his fellows best”と述べています。最初の言葉にhis fellowsという言葉が加えられていることは非常に興味深いことです。現在の標語が全ての人々を奉仕の対象としているのに対して、その対象をhis fellowsと限定していることは、とりもなおさず、当初は自分を取り巻く人々だけを念頭に置いていたと考えられます。
「自分の幸せは、自分の周りにいる人々の幸せと決して無関係ではない。良質の職業人とは、自己研鑽を重ねて自分の職場を健全に守るとともに、取引先、下請業者、従業員、顧客など自分の事業を営めば、必ず最高の利益が得られることを自分の職業で実証することによって、奉仕の精神の必要性を地域社会全体の職業人に伝えていかなければならない」と。

なお、profitsの解釈をめぐって金銭的な利益か、精神的な利益かの論議が今なお盛んですが、ロータリー運動を生みそれを発展させた背景に、資本主義経済の悪い側面がもたらした極端な唯物主義や拝金主義に対する反省、すなわち目先の利益第一主義からの脱却があることを考えれば、シェルドンのいうサービスによって報われるprofitsには、物質的、精神的利益がともに含まれ、人間が誰でも望んでいる物質的欲望と奉仕の心の調和の必要性を説いています。

また、この標語の日本語訳ですが、「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」「奉仕に徹する者に最大の利益あり」「積善の家に余慶あり」などありますが、必ずしもシェルドンのいわんとする真意を適格に表現しているとはいえません。なお、公式訳文は「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」です。

ちょうど時を同じくして、1909年に創設されたミネソタ州のミネアポリスクラブの初代会長であったフランク・コリンズが、今一つの標語を生み出しました。彼はロータリー運動の標語として“Service,not self”（奉仕だ、自己でない）を発表します。シェルドンの標語が経営哲学から生まれたものなら、これはキリスト教を背景とした宗教色の強いものといます。この言葉は、自己を滅却した奉仕を意味するものと受け取られ、自己否定につながるという反論が強く起こりました。半年後に、自己の存在を認めた上で、他人への奉仕を求めるという意味の修正が加えられた“Service above self”が広く使われ初め、1921年コリンズの死後、“Service above self”に変更されました。この言葉も「超我の奉仕」「自己研鑽の奉仕」「奉仕第一、自己第二」などと訳されていますが、aboveは単に上を表わす前置詞としてではなく、selfとserviceを対等に結びつける接続詞と考えるほうが妥当です。その解釈からは、自己の主体性を認め、奉仕の心の主体性を認めるならば、自己の存在が奉仕を越えるものでもなく、奉仕が自己を越えるものでもないことになります。selfとserviceには序列をつけるべきではなく、両者の価値は同列であり、渾然一体なものと考えることが必要なのです。

しかしそのような職業奉仕の理念も、2001年度の規定審議会において、ロータリーの用語から性に関する用語を廃止する決定がなされ、同年“He profits most who serves best” の標語が“He”という男性代名詞が含まれているとの理由で、一時使用停止となってしまいました。しかしシェルドンの唱えたこの精神は、我々ロータリアンの心の中で脈々と生き続けています。

↑概論トップ

←BACK"初期ロータリークラブ例会"

NEXT "国際ロータリーの発展"→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集 Ⅰ
・職業奉仕講演集 Ⅱ
・職業奉仕講演集 Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第6章

国際ロータリーの発展

1907年ドナルド・カーターの入会によって、世のため人のためという考え方が生まれ、何かしら対社会的意義を感じたロータリーでした。そしてポール・ハリスとドナルド・カーターは、世のため人のためにということであれば、なにもシカゴの街だけでなく全米の商的諸都市にクラブがあってもよいのではないかと考えました。今でいう拡大の気運が芽生えてきたのです。

しかしながら前章で述べたように、親睦一辺倒のクラブに、世のため人のためにという奉仕の考え方と、拡大という厄介なものまで持ち込んだために、クラブはもめにもめてしまいます。ポール・ハリスの方針に積極的に賛同したのは、ドナルド・カーターや1908年に入会したアーサー・フレデリック・シェルドンなどの少数派であり、クラブ内で圧倒的多数を占めていた「親睦・互恵派」との間で繰り広げられた論争の激しさは、想像を絶するものだったようです。

ポールは過ちをおかして居座ったといっていいような第4代目の会長就任時に、クラブに宣伝拡大委員会を設置し、迷わず初代宣伝拡大委員長にシェルドンを任命します。ここでいう宣伝とは、単にピーアールするという意味ではなく、ロータリー思想を地域社会に蔓延させるということであり、拡大とは、ただ単に新しいクラブを作るというだけでなく、ロータリー思想を蔓延させるヘッドコーターとしてクラブを作ることであります。

1908年に2番目のサンフランシスコクラブが、1909年に3番目のオークランドクラブができ、同年ロサンゼルスクラブ、シアトルクラブ、ニューヨーククラブ、ボストンクラブと次々新しいクラブが誕生しました。しかしながら奉仕の理念の提唱と拡大は、なかなか至難のことでした。現在日本のような交通機関の発達した国でも、一つのクラブを作るのに最低6ケ月から1年、2年の歳月を要します。20世紀初頭のアメリカにあって、1908年から1910年の3年間に15ものクラブを作ったのですから、大変な犠牲が払われたと思います。2番目のサンフランシスコクラブを作るにしても、延々3000Kmを大陸横断鉄道に乗り、長時間かけて現地に乗り込み、設立の準備をおこない、またとってかえしてシカゴクラブで報告し、理解を得るといったように、並大抵のことではなかったと思います。

しかも、ポールやシェルドンの話す拡大のことなど猛反対こそあれ、耳を貸すものなどありませんでした。その中で、ポールとシェルドンは一心に拡大に打ち込み、やめることをしませんでした。ついにクラブの会員は、ポールがいうのならまだしも、新参者のシェルドンなどのいうことは聞けないと、例会においてシェルドンの宣伝拡大委員長罷免の緊急動議が出されるにいたりました。

現在では、理事会の先議権でもって撤回させることが可能ですが、当時としてはそのような規則がなく、例会がすぐに総会に変わることが可能でした。そこで討論決議したところ、シェルドンの宣伝拡大委員長罷免が決定しました。それを見ていたポールは、自分が信任して命じた委員長が罷免になるということは、会長不信任と同じであると考え、任期半ばにして会長職を下ります。

親睦派のハリー・ラグルス、チャールズ・A・ニュートン、ドクター・ネフらがその収拾のために集まり、後任人事について協議します。その結果、全員一致でハリー・ラグルスを会長に推挙し、彼もこころよ

く承諾して任期半ばの会長職に就任します。ハリー・ラグルスの人物像は前にも述べたように、ロータリーソングの生みの親であり、クラブ親睦を大きく盛り上げた立派な人です。

さてここで問題の宣伝拡大委員長を誰にするかということで、いろいろと意見が出されましたが、これも全員一致して、チェスレイ・ペリーに白羽の矢を立てます。チェスレイ・ペリーは、学生時代よりグループ活動の管理に優れた才能を持ち、その事務管理能力については超一流でした。またクラブ会員の尊敬をも一身に集めていました。彼らはこのチェスレイ・ペリーを呼び、奉仕奉仕で失敗したシェルドンの後を継いで宣伝拡大委員長をやってほしいが、なぜシェルドンがこの宣伝拡大委員長を罷免されたかは君もよく知っているだろうが、シェルドンのように奉仕奉仕、拡大拡大と目くじらを立てないで適当にやってほしいと因果を含めます。すなわち親睦派の人々は、チェスレイ・ペリーの持つ管理能力をもって、奉仕派の独走を押さえるための布陣でした。

さて宣伝拡大委員長に就任した途端、チェスレイ・ペリーは奉仕派を押さえるどころか、ポール、シェルドンの方針を全く踏襲して、さらに発展させていったのです。これによってクラブはまた、奉仕派、親睦派に分かれて、しらけムードが漂う雰囲気になっていきました。

チェスレイ・ペリーがこのように寝返ったのにはそれなりの理由があります。それは、チェスレイ・ペリーが宣伝拡大委員長に就任した夜に、ポール・ハリスから長い長い電話があり、二人で何かを話し合っていたという事実があります。ポールの晩年の追想録に、その時自分は、チェスレイ・ペリーに何をいい、何を話したか、またチェスレイ・ペリーがなんと答えたか今は記憶にないが、チェスレイ・ペリーは自分がいったことをよく理解し、納得して確認してくれたと結んでいます。

このようにして、親睦派の計画も水泡に帰してしまいましたが、チェスレイ・ペリーはシェルドンと異なり、偉大なる組織管理者です。クラブがだんだんと荒れていくのを見ながら拡大を続けるとともに、自問自答します。ロータリークラブには親睦というものが必要であるのか、そして無くてはならないものなのか？、明らかに答えはイエスです。では翻って、ロータリークラブには奉仕、すなわち世のため人のためにということが必要であるのか？これも答えはイエスです。

しかしながらよくよく考えてみますと、親睦は内に向かう力であり、奉仕は外へ向かう力で、その住む世界が全く違います。たとえれば水と油の関係のようで、親睦を主にやろうとすれば奉仕ができなくなり、奉仕ばかりやるとクラブが二つに割れてしまいます。この相矛盾する親睦と奉仕を調和させるものが何かあるのではないかと考えます。

そして熟慮のすえ、「この相矛盾する親睦と奉仕（＝拡大）を一つのロータリークラブの中でやろうとするから無理があるのだ。この厄介な奉仕（奉仕理念の追求・提唱・拡大）には大変な時間と労力、そして費用がかかる。この部分を別枠の団体に請け負わしておこない、クラブは主として、親睦の場として活動していってはどうか」と考えが帰着します。

1910年当時、全米でシカゴクラブを入れて16のクラブができあがっていました。そこで、その16ロータリークラブの連合組織体をつくって、奉仕の部分だけをこの団体に請け負わす、いわゆる連合組織体構想を生み出します。善は急げで1910年、チェスレイ・ペリーはシカゴに各ロータリークラブの代表を集め、この構想を打ち明け協力を求めました。その結果、各代表は早速クラブに持ち帰り、賛成の議決を送ってきますが、言いだしのシカゴクラブだけが最後まで難色を示します。

その理由はロータリークラブと連合組織体との位置づけの問題でした。すなわち連合組織体がシカゴクラブより上にあるのかそれとも下にあるのかという問題です。もし上だとすれば、ロータリークラブを作り、今は15の子クラブを生み、今また孫のような連合組織体の下では到底承服できないというのが理由です。また連合組織体が下であるというのも常識では考えられません。上だ下だと議論百出してなかなか決まりませんでした。議論のすえ、対等ではどうかという意見が出てきます。

この対等論にもいろいろと難点がありました。この連合組織体はシカゴクラブの活動の自由を奪うものになるとされ、この考え方が大勢を占めていたといわれています。そのうちに、各クラブの自主独立性を認めた上で、各クラブの協調をおこなうことは可能であるが、あれはしてはいけない、これもしてはいけないということであれば、絶対に許せないという具合に主張が変わり、最後に、アメリカ合衆国でも、それぞれ独立した各州を作ったのだから、各クラブの独立性を保障した上で、全米的な立場から高次の団結をおこなってもよいのではないかと考えるようになりました。そして、全米ロータリークラブ連合会National Association of Rotary Clubsなる組織体ができあがります。

初代会長の選出にあたり、シカゴクラブを除く15のクラブは、生みの親であるシカゴクラブより初代会長を選ぶのが妥当であると申し入れ、シカゴクラブで人選することになりました。創立者のポール・ハリスに初代会長の声があがりますが、この2〜3年間親睦派と奉仕派とでクラブを二分したのもポールだということでなかなか決まりませんでしたが、1910－1911年5代目会長A・M・ラムジーがその雄弁にものをいわせ、"全米ロータリークラブ連合会"においてシカゴクラブが名誉ある指導的地位をもつべきであること、およびその会長としてロータリーの思想を推進するという目的から最適任者を選任すべきであること、そして誰が会長になるかということは問題ではない、どのような理想を達成すべきかが大切であると説いた人ではなく、ロータリーが大切だ、だからポール・ハリスを選ぶべきだと熱弁をふるい、万雷の拍手でポール・ハリスを全米ロータリークラブ連合会の初代会長に推すことに決議したのです。チェスレイ・ペリーは全米ロータリークラブ連合会の第1回大会の議長に選任され、ポール・ハリスを初代会長に選任し、自らその幹事になったのです。

しかしその後も、全米ロータリークラブの定款をめぐり、また大論争となり、最終的に定款を承認したのは、1年以上経過した1911年6月20日のことでした。この連合会ができて、やっとシカゴクラブ内の親睦派と奉仕派に分かれての抗争に終止符が打たれました。

全米ロータリー連合会が発足第一番目の事業として、企業倫理の問題を討議・研究して一般的基準を確立すべき委員会の設置を決めました。これを企業経営問題担当委員会と名付けました。会長ポール・ハリスは躊躇することなく、フレデリック・シェルドンを初代委員長に任命して、かつての彼の苦労に報いたのでした。この間にあって、国際ロータリーのその後の慣例確立に重大な影響を与える出来事がありました。

一つは、ロサンゼルスクラブが1909年に創立され、シカゴクラブの承認を受けてから、同じロサンゼルス内にNational Rotary Clubなるものを、ハーバート・C・クイックなる人物が創立し、会員の勧誘をおこないました。両クラブとも会員がほぼ150名に達しました。結局1912年に両クラブは合意に達し、合併することによって問題が解決しましたが、このことが一行政地区に対するロータリークラブは一つたるべきことと、認証状の必要性を感じさせる重大な先例となりました。

もう一つは、カナダのウイニペッグクラブの創立によって、ロータリーがアメリカ以外すなわち国際的になったということです。1908年にウイニペッグのP・M・C・マッキンタイヤーがその従兄弟のシカゴクラブ会員ウイリアム・ローダーを訪ねたとき、ローダーは彼にロータリーの話をし、ポール・ハリスとチェスレイ・ペリーを紹介しました。四人は熱心にロータリーの奉仕について語り合い、ウイニペッグにロータリークラブを創立すべきことを勧めました。その後2年間、熱心な文通と激励がつづき、1910年11月3日にカナダのウイニペッグにクラブができ、ロータリークラブは国際的なものになりました。
その次に目標になったのは、英本国でありました。アメリカでできたロータリー思想が、どのようにして英本国に影響を与えることができるかが、最大の課題でした。しかしこの場合、目標達成の見通しがないわけではありませんでした。そのもっとも明るい点は、シェルドンがその経営学理論に基づくセールスマン養成所の分校をロンドンに持っており、そこの代表者として、セイヤ・E・スミスがいたことです。そしてシェルドンの知性と雄弁をもってすれば、理論上の説得はさして困難なことと思われませんでした。

シェルドンは連合会の命を受けて、ロンドンに乗り込みました。ちょうどその時、ボストンクラブ会員で

あるハーヴェイ・ウイラーがロンドン支店を開設するため、ロンドンに滞在していました。その三人が協力しあい、その活動が実を結び、1911年にロンドンクラブが誕生しました。その後、シェルドンとスミスがマンチェスターを訪れ、そこにもロータリークラブを設立したとき、アイルランド人のスチュアート・モーローがいました。彼は、アメリカ在住中にサンフランシスコクラブの会員となり、ロータリー思想に共鳴し、その後故郷のダブリンに帰り、そこに自分の発意でロータリークラブを創立しました。 そのことを知ったシェルドンは、ポール・ハリスとチェスレイ・ペリーに報告しました。彼らは大変喜んで、モーローに書状を送り、激励するとともに、イングランドおよびアイルランド各都市にロータリークラブ設立を勧めました。

モーローはこれに力を得て、ベルファースト、エジンバラ、グラスゴー、リヴァプール、バーミンガムにロータリークラブを創立することに成功します。イギリスにロータリー活動をもたらした功労者としてモーローに賛辞を送る人がいる一方で、彼が新クラブ会員からいくばくかの金をピンハネしていたことをもって、彼の動機に疑問を投げかける人もいます。その後ロータリーを追放されたスチュアート・モーローは再びアメリカに渡り、ソロプティミストクラブの創立者として世の脚光を浴びるという数奇な人生を送ることになります。

次々と拡大していきましたが、次の課題は非英語国にロータリークラブを創立することでした。ロータリー思想は、単に英語系国民に特有な思想なのかどうかが問題となりました。あるアメリカの商人にキューバのハバナでロータリークラブ創立を依頼しますが、失敗に終わります。そのため、ロータリーはアングロサクソン的な思想に過ぎぬものであるとされるにいたります。
しかしその後、フロリダのタムバクラブのアンジェル・ケスタとジョーン・ターナーがハバナクラブ創立に成功しました。ケスタはこれに気をよくして、自分の母国であるスペインに帰り、1920年にマドリッドクラブを創立しました。これがヨーロッパ大陸に最初にできたロータリークラブです。

その後ヨーロッパ大陸内部のロータリークラブの拡大については、フレッド・ティールという人物が活躍し、スペイン、フランス、オランダ、デンマークその他の各国にロータリークラブを創立していきました。そしてこれが契機となって、スイスのチューリッヒにロータリー事務局が設置されることになりました。

次に南米諸国については、ウルグアイ人ヘリベルト・コアテスが1928年にモンテヴィデオクラブ（ウルグアイはブラジルとアルゼンチンとの間にある小国で、モンテヴィデオはその首都である）を創立するとともに、南米各地にロータリーの拡大を進めていきました。

このようなロータリーの世界的発展は、多くのロータリアン達の献身的な奉仕によっておこなわれましたが、その中で最も注目すべきは、カナダのカルガリークラブのジェイムズ・ディヴィッドソンの快挙です。

彼は1921年に友人J・L・ラルストン大佐と協力してオーストラリアのメルボルンとニュージーランドのウェリントンにロータリークラブを創立するとともに、その後RIの委嘱を受けて、1928年から約2年半の歳月を費やして、地中海沿岸諸国ならびにアジアの各地にロータリー拡大の旅に出て、アテネ、イェルサレム、カイロ、ボンベイ、デリー、マドラス、コロンボ、ラングーン、クアラルンプール、セレムバン、イポー、バタヴィア、バンドン、マラン、セマラング、シンガポール、ペナン、バンコック、ホンコン等にロータリークラブを創立したのです。

このようなロータリーの国際的発展の状況の中から全米ロータリークラブ連合会も国際的にならざるをえず、1912年第3回全米ロータリークラブ連合会で、ついに国際ロータリークラブ連合会と改称することになりました。初代会長にグレン・C・ミードを選び、初代事務総長にチェスレイ・ペリーを選任しました。またその当時健康を害して引退していたポール・ハリスを名誉会長に選出しました。

チェスレイ・ペリーは、その後32年間にわたり、事務総長の任にあたり1942年高齢のため引退しまし

た。そして事務総長引退後、1947年シカゴクラブの会長に就任しました。彼はロータリーの世界的発展に偉大なる功績を残しましたが、その中で特に注目すべきことは、機関誌『ザ・ロータリアン誌』を自ら編集し、ロータリー思想の普及に力を注いだことです。1910年にポール・ハリスが「合理的なロータリー的なものの考え方」なる論文を書いたとき、これを全米のクラブに知らせるために、1911年1月に雑誌発行を試験的におこなったところ、大成功のため、以後これが今日に及んでいるのです。当時、この雑誌はThe National Rotarianと呼ばれ、現在のロータリアン誌の前身です。

ところでこのように、ロータリーが世界的な発展をとげる過程において、国際ロータリークラブ連合会の中においても、また各国に散らばるロータリークラブにおいても、ロータリー思想の普及、あるいはその管理について次のような二つの考え方が起こってきました。

その一つは、ロータリークラブは、国際ロータリークラブ連合会の構成単位をなし、毎年1回国際大会を開いて、共通の問題を討議するのはよいとして、全世界奉仕概念そのものの理解は共通であっても、その表現方法ややり方という点になると、各国各地の風俗習慣に合致しなければなりません。また、奉仕理論そのものの理解の仕方如何によっては、若干の相違が現れてくることもあります。そのため、全世界のロータリークラブの地域性を認め、各地域内の特殊性に応じて、ある程度の集団的自治の原則を認めるべきではないかという考え方、すなわちロータリー組織の地域的運用の問題として、地域の自主性を認めて、それぞれの地域の自治組織の上に国際ロータリー連合会を置こうすとするものです。そのあらわれとして、1914年にイギリスロータリークラブ連合会ができ、これをイギリス、アイルランドの自治組織としました。そして、1914年のヒューストン大会で承認を受けたのです。

しかしながら、また一方、1915年のサンフランシスコ大会では、世界共通の標準クラブ定款を採用し、国際ロータリークラブ連合会を各クラブ直結する方式をとらなければならないとする考え方が、大勢を占めるようになってきました。すなわち、各ロータリークラブ所在地を地区（District）と呼ばれるものに分け、各地区に国際ロータリークラブ連合会の役員としてガバナーを置き、ガバナーが直接各クラブを指導監督するというものです。

そしてその頃に裏面では、奉仕哲学の認識が極度に深まるとともに、ロータリアンは個々の自覚を深め、風俗習慣、人種を超えて人と人として結びつけるという認識が深まるにつれ、地域性にこだわっていることが低く見えるという考え方に到達します。また、ロータリーは水平運動であって、人の上に人を作らず、人の下に人を作らずという理論からしても、地域の特殊性を認めるのはおかしいと論じられました。1915年のサンフランシスコ大会では、ロータリーの倫理訓を定め、地区を定めたのであります。しかしながら、すでにできあがっていたイギリスロータリークラブ連合会の既得権を認めないわけにはいきませんでした。

1922年のロサンゼルス大会で、国際ロータリークラブ連合会が、国際ロータリー（Rotary International RI)と改称したとき、イギリスロータリークラブ連合会もイギリス・アイルランド国際ロータリー（Rotary International in Great Britain and Ireland RIBI）と呼ぶことになりました。その後、1927年ベルギー・オステンド大会でRIの直轄方式が確定したときも、RIBIだけは依然として既得権を尊重されました。

1934年ポールは、RI会長ジョン・ネルソンと事務総長チェスレイ・ペリーらとともに、一発触発になっていたRIとRIBIとの関係を修復するためにイギリスを訪れました。
RIとRIBIとの対立点として、次のような問題が考えられています。
◎RIとしては、既得権を主張してことごとく対立してくるRIBIの存在そのものが、疎ましい存在であった。なお、このRIBIに倣って日本が日満ロータリー連合会RIJMを結成しようとする動きがあり、このような中間管理組織結成に伴うRIの弱体化を恐れた。
◎RIBIとしては、アメリカのやり方をそのまま押しつけてくるRIに対する強い反感があった。
◎RIBIはシェルドンの「He profits most who serves best」は、成り上がり者が幅を利かせているアメリカでは必要かもしれないが、伝統的な倫理観を備えているイギリスやヨーロッパ大陸には必要がなく、

「Service above self」だけで充分だと主張した。
◎目標設定計画Aims & Objects Planが、RIBIのパイロット・プログラムとして試行され、1927年のオステンド大会で正式に採用されたにもかかわらず、アメリカではなかなか採用されなかった。
◎RIBIが再三にわたって提案したにもかかわらず、アメリカの大都市クラブが一都市一クラブを主張し続けた。（1933年に決議33-26として改正）

ポールの努力にもかかわらず、会議は双方の意見が噛み合わず大きな収穫はありませんでしたが、取り敢えず、決裂という事態だけは避けることができました。

1967年のニース大会においてRIBIの地位を実質的に変更することを基本的に了承し、ついに、1968年にRIBIはその形だけが残り、実質的な点はことごとくRIの直轄方式が採用されるようになりました。また、特定の地域にクラブ数が少なく、地区を結成できないものは、当然としてRI理事会が直接監督するという形をとるようになったのです。

↑概論トップ
←BACK"一般奉仕概念の登場"
NEXT "奉仕の拡大 -職業奉仕-"→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集　Ⅰ
・職業奉仕講演集　Ⅱ
・職業奉仕講演集　Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第7章

奉仕の拡大 –職業奉仕–

ロータリーの綱領が、「有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成する」という文言で始まっています。これはロータリーの根幹が職業奉仕にあることを意味しています。数多く存在する奉仕クラブの中で、職業奉仕の理論付けと実践を活動主体とするクラブは、ロータリークラブ以外には存在せず、言い換えれば、職業奉仕団体であることが、ロータリークラブの特徴であるともいます。

「職業奉仕」というロータリーの専門用語を、職業Vocationと奉仕Service とを結び合せた一般的な熟語として考えるところから、職業と奉仕の単語の持つ意味をめぐるいくつかの異なった解釈や誤解が生じ、職業奉仕の概念を難しいものにしています。職業奉仕を正しく理解しようと考えるならば、職業奉仕 Vocational Serviceという言葉は、ロータリーが独自に作り出した新しい概念を持つ用語だという前提に立つことが必要です。

「親睦」から出発したロータリー運動はその進化過程の中で、まず「会員の事業上の利益の向上」という目的を加えました。当初は会員間の原価取り引きなどの物質的相互扶助によって事業上の利益の向上を図りましたが、その行為の不公平さに気づいて、精神的相互扶助による利益の向上に軌道修正し、それが現在の職業奉仕の源流ともいる一般奉仕概念として確立されました。初期ロータリー運動の歴史は、職業奉仕概念を生み出し、その理論づけをおこない、ロータリー哲学として完結させた歴史ともいます。

ミシガン学派の経営学、特に販売学の大家としてロータリー運動の理論づけを試みたフレデリック・シェルドンは、ロータリークラブが職業人であるロータリアンで構成されている以上、会員個人の事業母体の発展ないしは安定的な維持、利益の向上を図ることが、ロータリー運動を持続し発展するための大前提であると考えました。シェルドンは、繁栄する事業の共通的な特徴に、顧客や取引先の立場を配慮した Service があることを指摘し、不正や不道徳や世間に受け入れられないような方法で、一攫千金の利益を上げるよりも、「自分の事業の永続性のある発展は、顧客や取引先や従業員や下請など自分の周りにいる人たちの幸福に配慮しながら、適正な利潤を確保することによって、始めて得られるものである」とする考え方を説き、それがロータリーの標語であるHe profits most who serves bestを生み出しました。

この標語は、フランク・コリンズが同時に提唱したもう一つの標語Service,not selfとともに、1911年にポートランドで開催された第2回全米ロータリークラブ連合会大会で、ロータリーの標語として採用されることになります。
この大会でロータリー・モットーとしてふさわしいと認められた二つの標語は、Service,not selfが1921年にService above selfに変更されるという経緯こそ経ましたが、その後40年間、ロータリーの根本的な理想を効果的に表現する標語として、一般大衆やロータリアンの心にはっきりと印象づけられ、奉仕こそ利益の基本であるという真理を教えてきました。その結果をふまえて、1950年デトロイト大会?における決議50－51によって、この二つの標語はロータリーの標語として正式に採択されるにいたりました。

職業奉仕とは、単に自己の職業活動に打ち込むことでも、利益を無視してサービスすることでもありません。Serviceの心と実践があるからこそ、事業の安定と発展があり、適正な利潤が得られるからこそ、Serviceができるという前提に立って、自分の職業活動に関連する全ての人々と、利益を分かち合いながら事業を営めば、精神的にも物質的にも最高のprofitsが得られることを、自分の職場を実例として証明することによって、業界全体にServiceの必要性を実証することであります。そして、そのために日々、普遍的におこなう職業生活を、ロータリーでは職業奉仕と呼んでいます。

職業奉仕概念と相前後して生まれてきた対社会的な奉仕、すなわち社会奉仕Community ServiceにおけるServiceの言葉の持つ意味合いは、ボランティアやチャリティーの色彩が強く感じられ、職業奉仕のServiceとは別次元のものと考えるべきです。

ロータリーの綱領から職業奉仕を考えるとき、すでに、1912年の綱領において、職業奉仕の基本理念が明文化され、現在に引き継がれています。
（1）職業はVocationすなわち天職であり、世の人に有用であると認められたすべての職業は神聖であって、その職業には貴賤がない。
（2）自己の職業の道徳的倫理規準を引き上げるために努力する。
（3）自己の職業の品位を上げて社会的認識を高める。

初期ロータリーにおける一般奉仕概念の模索は、すなわち職業奉仕概念の模索は、1911年のロータリー標語の採用、1915年のサンフランシスコで開催された第6回国際ロータリークラブ連合会年次大会におけるロータリーの綱領の改正、ならびに、「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」が採択され、1916年の「ロータリー通解」A Talking Knowledge of Rotaryの発行によって、その大要が確定されました。

「道徳律」とも呼ばれるこの「ロータリー倫理訓」は、ロータリアンの職業上の倫理観を成文化したものであり、1913年バッファローで開催された第4回国際ロータリークラブ連合会年次大会で、最初の起草委員が任命され、全世界のロータリアンから職業倫理に関するアンケートをとる作業が開始されました。翌年のヒューストン大会に提出するために、その作業を引き継いだアイオワ州シューシティクラブのパーキンズ他5名の起草委員が、ヒューストン行きの特別列車の中で、急遽まとめ上げたといわれています。翌1915年のサンフランシスコ大会で正式に採択されました。そして「ロータリー通解」に全文が掲載されました。

《全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓》
1. わが職業は価値あるものであり、世に奉仕する絶好の機会が与えらているとと考えるべきこと。
2. わが身を修め、わが能率を向上し、わが奉仕を拡大すべきこと、そうすることによって、最も奉仕するもの最も多く報いられるというロータリーの基本原則に対して忠実なることを立証すべきこと。
3. われは実業人であり成功の野心を抱いていることを認める。同時に道徳を重んずる人間であり、最高の正義と道徳に基づかざる成功はこれを欲するものではないと自覚すべきこと。
4. わが商品、わがサービス、わが創意工夫を、利益を目的として他と交換するのは合法にして道徳に基づくとの信念をもつべきこと。ただし、全ての当事者がこの交換によって利益を受けることを前提とする。
5. わが職業の標準を向上させるため最大の努力をいたし、その結果わが業務の進め方は賢明にして利益をもたらし、この実例にならえば幸福への道が開かれることを同業の者に悟らしむよう実践すべきこと。
6. わが競争者と同等ないし、それ以上の完全なサービスをなし得るような方法をもって業務を運営すべきこと。もし疑わしい際には厳格な意味の責任義務を越えて一層のサービスをおこなうこと。
7. 専門家あるいは実業人の最大の資産のひとつはその友人であることを理解すべきこと。?そして友情を通じて得られたものこそ妥当なものであることを理解すべきである。
8. 本当の友人は互いに強要するものではなく、利益のためにみだりに友人の信頼を用いることはロ

ータリーの精神に一致せず倫理訓を汚すものである。
9. 他の人がおこなわないような不正な方法によって機会を利用して得た成功は合法的でなく道徳にも反する。また道徳的に疑わしいため他の人が採らない機会に乗じて得る成功などは欲しないこと。
10. われは一般の人以上にロータリアンたる友人を拘束することはしない。ロータリーの原則は競争ではなく協力であるからである。党派心はロータリーのごとき制度においてはあってはならない。人格はロータリーの内に限られるものではなく、広く人類一般に深く根ざすものであることを確認し、全ての人や社会制度をこの高遠な理想に向かわしめるためにロータリーは存在するものである。
11. 最後に「全ての人にせられんと思うことは人にもその通りにせよ」という（マタイ伝第7章）黄金律の普遍性を信じ、地上の天然資源に対して全ての人に均等な機会を与えられてこそ人類社会は最良の状態となるということを主張するものである。

この「ロータリー倫理訓」は全ロータリアンに対する職業倫理基準の集大成となりましたが、後日、その内容の厳しさと表現方法が宗教的であるとする批判が続出します。特に6章の「もし疑わしい際には厳格な意味の責任義務を越えて一層のサービスをおこなうこと」を厳密に解釈すれば、販売した商品については永久に責任を取らなくてはならず、現実の問題として実効不可能という批判が集中しました。

表現に対する非難は、11章の宗教的基準である黄金律をロータリー倫理基準に据えたことに対する反発であり、政治と宗教は取り込まないとするロータリーの原則に反するのみではなく、逆にロータリー運動が宗教活動と混同され、無用の誤解を招くというものでした。

RIもその位置づけに苦慮したあげく、1927年に改定委員会を設置、1931年に宣伝したり領布することが中止され、ついに1951年にロータリーのあらゆる文書から姿を消しました。ただし、職業奉仕のよりどころとして「職業倫理訓」の存在を否定することには、ためらいがあったらしく、国際ロータリー細則第16条「道徳律」はその後も残されましたが、ついに、1980年の改正で完全に削除されることになります。

こうした経緯から「職業倫理訓」は姿を消したものの、その内容は職業奉仕の真髄に迫るものとして復活を望む声も多く、ついに、1989年RIはこの「職業倫理訓」に代わるものとして、その内容に大幅に修正を加えた「職業宣言」を採択しました。

《職業宣言》
（1989年規定審議会）
（1）職業は奉仕の一つの機会なりと心に銘せよ
（2）職業の倫理的規範、国の法律、地域社会の道徳規準に対し、名実とも忠実であれ
（3）職業の品位を保ち、自ら選んだ職業に於て、最高度の倫理的規準を推進すべく全力を尽くせ
（4）雇主、従業員、同僚、同業者、顧客、公衆、その他事業または専門職務上関係を持つ全ての人々に対し、ひとしく公正なるべし
（5）社会に有用な全ての業務に対し、当然それに伴う名誉と敬意を表わすべきことを知れ
（6）自己の職業上の手腕を捧げて、青少年に機会を開き、他人からの、格別の要請にも応え、地域社会の質を高めよ
（7）広告に際し、また自己の事業または専門職務に関して、これを世に問うにあたっては正直専一なるべし
（8）事業または専門職務上の関係において、普通には得られない便宜ないし特典を、同僚ロータリアンに求めず、また与うることなかれ。

「職業宣言」の間接的な表現に比べれば、「ロータリー倫理訓」は直接的且つ具体的であり、万人の心を強く打ちます。多少のキリスト教的な宗教色があるとしても、その精神はロータリー職業倫理の真髄を捉えており、現在にも充分通用する理論と思われます。

職業人と?してのロータリアンの心構えを、ロータリーの倫理基準から具体的に記述したものが「ロータリー倫理訓」や「職業宣言」とするならば、それを、ロータリアンのみならず一般の職業人にも理解できるように、簡潔且つ的確にまとめたものが「四つのテスト」です。

《四つのテスト》
言行はこれに照らしてから
1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか

この簡単な言葉が生まれる背景には、次のようなエピソードがあります。

1954年度の国際ロータリー会長ハーバード・テイラーは、その22年前にシカゴのあるアルミ食器製造会社の社長を引き受けることになりました。その会社は破産状態になっており、彼は債権者の依頼でこの会社の再建に乗り出したのです。テイラーがいろいろ調べてみると、会社の将来は絶望に近いものでした。同業の会社には、実力を備えたものがいくつもあるし、もちろんそこには優秀な社員がたくさんいました。これらの会社に肩を並べていけるものではありませんでした。

そこでテイラーは考えました。この瀕死の重傷を負った会社を再建するためには、従業員一同、一丸とならなければならない。そのためには、共通の信念を持たなければならない。しかも、強力な同業者と競争できるくらいの製品を作り出す精神的基盤が必要だと考えました。 ここがテイラーの偉大な点です。普通の人ならば、生産がどうの、材料がどうのという有形の製造過程だけを追うのですが、その根底にある人間の精神に着目したのです。そして6ケ月ほど社長室の机の上に書いては消し、消しては書いているうちに命令的倫理訓ではなく、自発的且つ発想刺激的な表現が浮かんできたのが、この「四つのテスト」です。

その第一のもの、したがって原則の中で最も初めに考えなければならないことが、「真実」ということでした。真実は一つ、この一つゆえに、客観性があり信頼ができ、多数の人がこれをよりどころにして意志を結集することができ、また相互に直接関係のない人たちを信用という紐によって結びつけることができます。しかし「真実」だからといって、直ちに行動に移せるものでもありません。それを決定する原理として、「公平」「好意と友情の強化」「有益」の原則がでてきます。これら四つの規準に照らして、絶えず自分の行動を確かめ反省しながら会社の経営をおこなえば、全社員が一丸となることができるのではないかと確信しました。幸いにして四人の重役が宗教上の宗派は異なっていましたが真面目な人たちで、このアイディアに賛成し協力してくれました。このようにして、出発点においては銀行から多額の借金がありましたが、10年後には、百万ドルの配当金を株主に出せるまでに発展しました。この「四つのテスト」は、最初はテイラーが所属するシカゴ商工会議所の会員に対するモットーとして配布されていましたが、後に彼が、シカゴクラブ会長を経て、RI会長に就任するにあたって、「四つのテスト」があまりにも素晴らしいので、全世界のロータリアンの職業奉仕の指針にしたいという声があがり、彼がRI会長に就任した1954年に、その版権がロータリーに寄付され、今日にいたるという経過をたどっています。

「四つのテスト」は世界各国の言葉で翻訳され、広く活用されていますが、その位置づけに関しては「「いかなる意味においても規則として取り扱われてはならない」と規定されています。人間関係における高度の道徳的水準の向上を図り、それを維持するために、書簡箋や印刷物に使用することが奨励されていますが、販売や利益を増すための広告と結びつけることは禁じられています。

クラブ管理組織の改革によって、四大奉仕の一つとして職業奉仕部門が正式発足したのは1927年ですが、それ以前は1910年に設けられた企業経営問題担当委員会Business Method Committeeが職業モラル向上のための活動をおこなっていました。

ロータリアン間の取り引きにおいて、「物質的相互扶助」が正式に禁止されたのは、1912年の「ロータリーの綱領」の改正によるものでした。その理論づけは1915年の「ロータリー倫理訓」および、1916年の「ロータリー通解」でなされています。ただしこれは、会員間の?相互扶助全てを禁止したのではなく、1912年に改正された「ロータリーの綱領」の中の「意見や商業取引上の方法を互いに話し合い、各会員の能率を増進すること」という条文からも伺えるように、「精神的相互扶助」を推進する方向に転換したことです。

ロータリーの経営哲学を遵守している会員が、万一倒産するようなことがあれば、それはロータリーの哲学が否定されることを意味します。事業上の助言や援助を必要としている会員に、「精神的相互扶助」によって援助することで、助けられた会員の事業が安定化すれば、結果として、ロータリーが提唱する職業奉仕の理論の正しさが客観的に実証されることになります。さらに、援助を受けて立ち直ったその会員の職業奉仕の機会を拡大させ、それが地域社会に、よりよい効果をおよぼします。
ロータリアン間の取り引き関係に関する指針は、1933年に理事会決議がされ、その後、1979年に一部改正されましたが、現在も有効です。

《ロータリアン間の取引関係》
ロータリアン間の取引関係に関するロータリーの方針は次の通りである。すなわち、ロータリアンはその同僚ロータリアンから、他の事業家に対する場合よりも多くの利便を期待してはならないし、ましてこれを要求するようなことがあってはならない。ロータリアンが、取引関係にある他の事業家には普通与えないような特典を同僚ロータリアンに（ロータリアンであるという理由だけで）与えるのは、競争業者に対するロータリアンの義務に反することであるし、また、ロータリーの職業奉仕の原則に背くことである。いかなる場合においても、ロータリーの親睦を利便や利益を得る手段として利用することはロータリーの精神から遠く遊離したものである。

1942年、RI理事会は「ロータリアンに対する事業上の援助と助言」を表明し、精神的相互扶助の具体的事例を成文化しましたが、1981年以降の「手続要覧」からは削除されています。

《ロータリアンに対する事業上の援助と助言》
ロータリーの親睦に確実な効果を与え、会員に有益な援助を与える機会を提供する手段としてクラブは次のことをおこなうべきである。
（1）事業上の助言や援助を必要とするロータリアンに内密にしかも親身な援助を与えるため、いろいろ異なった職業分類を代表する会員数名をもって委員会を作る。
（2）広く会員の利益のために、主として経済的な問題について討議するため「企業診断」あるいは「討論会」を開いて会員の利益をはかる。（理42－43）

1948年にRIから発行された「奉仕こそわがつとめ」は、1949－50年度RI会長パーシー・ホジソンによって書かれた職業奉仕の解説書であり、過去のロータリー運動の中で取り上げられた職業奉仕の具体例を豊富に盛り込んで、職業奉仕を実践するにあたって、ロータリアンが取り組まなければならない課題を、項目別に問題提起しています。なお、パーシー・ホジソンは自分が会長を務める年度の奉仕理念をわかりやすく示すための方法として、今日のRI会長テーマの原型ともいうべき目的を掲げました。その最初のテーマが「奉仕こそわがつとめ」です。

1987年、RI理事会は「職業奉仕に関する声明」を採択しました。この声明によって、ロータリアンが個人でおこなう職業奉仕活動に、クラブレベルの職業奉仕活動が加わることになりますが、ロータリーの奉仕哲学を帰納した結果導かれる職業奉仕概念とは大きな矛盾が生じてきます。

クラブ例会で会得された高い職業倫理は、まず自分の職場に反映され、その考え方で事業を営めば、必ず事業が発展することを、自分の事業所をその例として示すことによって、業界全体にその理念を波及させなければなりません。ロータリーでは、この理念に基づいた毎日の職業活動のことを職業奉仕の実践と呼んできました。ロータリークラブは一業種一人の会員によって構成されていますか

ら、会員の数だけ、職業奉仕活動の具体例があるのです。「職業奉仕に関する声明」における「クラブの役割は、たびたび職業奉仕を実践してみせることによって」と記載されている部分については、ロータリアンが自分の職業奉仕活動の実践例を示すことができても、現実に職業活動を営んでいないロータリークラブが、職業奉仕活動の実践例を示すことは不可能です。

その他クラブがおこなう活動例として、就職相談、職業指導、職業情報、職業活動表彰、さらには優良従業員表彰や職場見学などがあげられていますが、これらは本来の職業奉仕の概念とは大きくかけ離れた次元のものであります。むしろロータリークラブがおこなう役割は、会員に職業奉仕の心を育み、職業モラルを高めるための方策を考え実施することにあります。クラブそのものが職業奉仕の団体活動を実践することはありえないという結論に達します。

ロータリーの唱える職業奉仕こそ、二十世紀における最も進化した職業人の倫理基準であるといわれています。自分の職業に真摯に取り組むことは、別にロータリーの専売特許ではなく、それを実行している人は数多くいます。ただ、ロータリーの職業奉仕が他の類似の思考と異なる点は、それがクラブ例会におけるロータリアンの発想の交換を通じて理論が構築され、それを信奉したロータリアンの実践によって、その結果が実証されていることにあります。

かつて、「眠っているときの奉仕」というテーマをあげた人がいます。眠っているときでも脳は活動しているから奉仕を考えることは可能であるという結論は、いささか極論だとしても、ロータリアンの心構えは、職業人としての生活や例会時間以外でも全てのことがらをロータリー哲学に照らして行動することにあります。一般の社会生活を営む基準として、また、選択や決断に苦しむとき、その思考や判断基準の根底にロータリー哲学をおくことにこそ、ロータリアンに許された特権であり、ロータリーの原則にしたがってとった対処がきっと全ての問題を円満に解決する方策になるはずです。

初期ロータリーにおける一般奉仕概念の集大成を収録した小冊子が、1916年に出版された、1915－1916年度国際ロータリークラブ連合会の理論教育Philosophy and Education委員長ガイ・ガンディカーGuy Gundaker がまとめた［ロータリー通解］ A Talking Knowledge of Rotary です。［ロータリー通解］は32頁から成る小冊子で、1916年5月号から7月号までのThe Rotarian誌に掲載された論文をまとめたものであり、1916年7月に開催されたシンシナチ大会で採択認証を受けて、クラブ管理運営のテキストとして発刊されました。それまでは、ばらばらに行われてきた、各クラブの運営や管理をまとめ上げて標準化する基準を作ったことと、サンフランシスコ大会で採択された［全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓］を掲載することで、ロータリーの目的をめぐる奉仕か親睦かの論争に一応の区切りをつけ、職業倫理の高揚を前提としたロータリーの一般奉仕概念を確立し、初期ロータリーの思考を体系的に総括したものと言うことができます。

［ロータリー通解の内容］
◎ロータリー精神
◎ロータリー教育プログラム
◎ロータリークラブの効用と目的
◎ロータリアンの為すべき事
◎ロータリークラブの会員に対する義務と責任
◎ロータリアンの自己の職業と社会に対する義務と責任
◎ロータリー宣言
◎全職業人に対するロータリー職業倫理訓
◎ロータリークラブ

［ロータリー通解］の本文から、ロータリー運動の目的と、クラブ管理に関する項目の幾つかを紹介します。

****ロータリークラブの効用と目的****

ロータリークラブは事業または専門職務の各々の職種から選ばれた者によって構成され、次の目的を達成するために組織される。

1. 会員個人の向上。
2. 理想と現実の両面における、会員の事業の向上。
3. 会員の業界または業種の全体的な向上。
4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会の全体的な向上。

****会員個人の人格の向上 ****

各会員に対?して、ロータリーは次の活動を要請する。

1. 企業経営の経験を生かして、視野を広げること。
2. 新しい境地に思いをはせ、心に活力を与えること。
3. 他人に奉仕する気持ちをよみがえらせること。
4. 素晴らしい将来の可能性をめざして努力すること。
5. 人々の指導者となること。

****ロータリークラブ****

◎毎週一回、昼食会または夕食会に集う。

◎会員は地域社会における事業および専門職務の各職種の中から、積極的な代表者一名で構成されるという、独特のプランを採用している。

**** 綱　　領 ****

◎あらゆる正業の価値を認め、その職業を通じて、社会に奉仕する機会を与えられたものとして、各会員の職業の品位を高めること。

◎事業と専門職務の職業倫理を高めること。

◎アイディアを生かし企業経営を改善して、各会員の実力を増大させること。

◎友人や広く社会全体に奉仕しようという、各会員の夢が実現するように励ますこと。

◎奉仕の機会と成功への手段として、学問的な知識を高めること。

◎地域社会の公共の福祉に関する各会員の関心を高め、公共的、社会的、商業的、工業的開発について他の人々と協力すること。

**** 特　　典 ****

◎持つべき友が得られること。

◎純粋で健全な良き友情が得られること。

◎誠実で頼りがいある友人が得られること。

◎他の人々の仕事や問題や成功に関する啓示がうけられること。

◎効果的な経営方法の教育がうけられること。

◎友人や広く社会全体に奉仕しようという、あなたの夢が実現するように励まされること。

◎知己を広め、あなたとあなたの事業への信頼の念によって企業上の利益が得られること。

**** 義　　務 ****

◎定期的に例会に出席すること。

◎会費を確実に支払うこと。

◎依頼されたら、あなたの役割を果たすこと。

◎大きな心と寛大な精神を持つ人間であること。

エネルギーと行動力のある人間‥真の人間‥それがロータリアンである。

↑概論トップ

←BACK″国際ロータリーの発展″

NEXT ″奉仕の拡大 −社会奉仕−″→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集　Ⅰ
・職業奉仕講演集　Ⅱ
・職業奉仕講演集　Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第8章

奉仕の拡大 –社会奉仕–

ロータリーがその初期のクラブ活動の中から漠然とした対社会的奉仕概念をつかんだのが1906年のことで、1907年に改正されたシカゴクラブの定款に「シカゴクラブの利益の振興を図り、会員間に市民としての誇りと忠誠の精神を培う」の一項が加えられたことによっても分かります。

1907年シカゴクラブはシカゴ市に公衆便所設置運動を起こします。しかしながら、これよりも前に何か社会のためになることをしようとする会員がいました。その中の一人がクラーク・ホーレイです。彼の職業は医師ですが、彼の住む町に一人の半農の牧師がいることを知っていました。その牧師は貧しさと闘いながら伝道をおこなっていました。伝道の時に往復乗っていた馬が、ある日突然死んでしまいました。そのため彼は、土地を耕すことも、伝道を続けることもできなくなり、途方に暮れていました。この話を耳にしたホーレイはクラブ例会で発言を求め、その牧師に馬を買ってやることがいかに社会のためになるか、を熱心にみんなが賛同するまで説き、出席していた会員が直ちに金を出しあって馬を買ってやりました。

また、1908年には、あるシカゴクラブのロータリアンが例会に出席しようと道を歩いていたら、一人の足の不自由な少年が新聞を売っているのに出会いました。その日は大変寒い日で、その少年は薄着でブルブル震えていました。このロータリアンは新聞を買ってやろうと思いポケットに手を突っ込みましたが、あいにく10ドル紙幣しか持ち合わせがなかったので、その少年を連れて例会場に行き、他の会員に少年のありさまを見せ、友人から小銭を借りて新聞代を払い、自分の着ていた毛のセーターを脱いで少年に着せてやったところ、他の会員が少年の手に金を握らせ、ある者は帽子を、ある者は手袋を持たせてやりました。少年は幸せそうに例会場を出ていったのですが、この間、誰もほとんど一言もしゃべらずにこの行為がおこなわれました。

このようにして、シカゴクラブは社会福祉一般についての奉仕活動を企画する最初の常設委員会として、1910年「公共問題担当委員会」Civic Committeを設置しました。この委員会はロータリー最古の委員会として今日も存在しており、多くの社会奉仕の企画実践した業績を持っています。

シカゴクラブは、このほかに特殊専門的社会奉仕活動が必要な場合には別の独立した常設委員会を設置しました。そして社会奉仕の分野では二つの重要な委員会ができました。一つは、少年活動担当委員会Boys Work Committeで、1912年のことでした。これは、青少年が未来社会をになっているという展望に立って、青少年の諸々の活動を援助するものです。

今一つの委員会は、1925年に設置された身体障害児問題担当委員会Crippled Children's Committeです。身体障害児問題は、その後長い年月、ロータリアンを二分する論争を巻き起こすのです。

身体障害児に対する救済は1912年、ニューヨーク州のシラキューズクラブで始められ、次いでオハイオ州のトレードクラブが行動を起こします。この活動の中から、オハイオ州エリリアクラブのエドガー・アレンがロータリアンとしての生活の全てを身体障害児対策に捧げ、この問題を全米的に拡大し、国際身体障害児協会を設立します。そもそも彼は、ロータリークラブ入会の条件として、身体障害児対策事

業をクラブが積極的にバックアップすることを申し出ておりました。

1913年から1923年頃までの間、全米の多くのクラブが障害児対策に熱中し、他の奉仕活動はそっちのけで、「社会奉仕＝障害児対策」と競い合い、さながら福祉団体か慈善団体の様相を呈し始めました。

ロータリー運動の目的が「親睦」と「事業上の利益」から「奉仕」に転換された際、シカゴクラブで引き起こされた論争の副産物としてロータリークラブ連合会が生まれました。今度は、その対社会的な奉仕のあり方をめぐって、理論派と実践派との間で再び激烈な論争が起こりました。

ロータリー運動を「奉仕の心の形成」として捉えた理論派は、ロータリークラブの使命は、ロータリアンに「奉仕の心」を形成させることであり、ロータリアン個人個人が、He profits most who serves bestとService above selfの心を持って、自分の職場や地域社会の人々の幸せを考えながら、職業人としての生活を歩むことであると考えました。すなわち、クラブ例会で会得した高いモラルに基づく「奉仕の心」で事業をおこない、その考えを業界全体に広げていくことが、全ての人々に幸せをもたらし、それが地域社会の人々への奉仕につながることを確信したのです。もし、職業奉仕以外の分野で、奉仕に関する社会的ニーズがあれば、それぞれの会員が個人の奉仕活動として実施するか、自分が属している職域や地域社会の団体活動として実施すればよいのであって、ロータリークラブが実施母体になるのではなく、そのニーズを世に訴え、それに対処する運動が盛り上がるような触媒として機能すべきであり、どうしても地域社会に何かしたいのならば、職業上得られたprofitsから個人的におこなったらよいとする考え方です。

これに対して、「奉仕活動」に重きをおく実践派は、現実に身体障害者や貧困などの深刻な社会問題が山積し、これまでにロータリークラブが実施した社会奉仕活動が実効をあげていることを根拠に、理論派とことごとく対立しました。実践派から見れば、奉仕の機会を見いだして、それを実践することこそロータリー運動の真髄であり、単に、奉仕の心を説き、奉仕の提唱に止まる理論派の態度は、責任回避としか映りませんでした。

「奉仕の心の形成」と「奉仕の実践」の論争は、個人奉仕と団体奉仕、さらに金銭的奉仕の是非にまで発展して、綱領から社会奉仕の項目を外すべしという極論まで飛び出すほどの激しい対立が続きました。エドガー・アレンとエリリアクラブに代表されるような、多額の金銭的支出を伴うクラブによる団体奉仕を、ロータリーの社会奉仕として認めるか否かが議論の中心になったのです。

ロータリーの思考体系には、その原則を崩せばロータリー運動を成立し得ない必要条件と、ロータリアンやクラブの考え方に対して、その立場と善意を尊重して、容認することができる充分条件があります。奉仕の実践は、まさにこの充分条件の中に入ることがらであり、従来からおこなわれているいろいろな社会奉仕の考え方や行動を、これを機会に整理して調和させることが是非とも必要でした。

相異なる二つの考え方を、ロータリーの寛容の精神の下で調和させるために、当時の理事会は微妙に揺れ動きます。まず1922年、理事会はエリリア、トレード、クリーブラント各クラブより共同提案を受けて、これを奨励する決議22－17を決議しました。
「ロータリアンが身体障害児に対する関心を示し、且つ彼ら障害児に身体的矯正や外科的治療を施すことが有効な場合には、これを援助したいという意欲を表明していることに鑑み、国際ロータリー第13回大会は、各ロータリークラブがおこなっているかかる人道的活動を賞揚し、且つ本大会に出席している各代表者に対し、この問題に関する注意を喚起し、またこの運動が各クラブの地域社会における奉仕の機会を提供するものであることを、それぞれのクラブに認識させるように決議する」
しかし、この決議をおこなった直後に開催された理事会では、理論派の立場を考慮してか、これと全く相反する次のような決定をおこないました。

「国際ロータリーは世界各国の身体障害児問題が重要であることを認め、各ロータリークラブの会員

がなんらかの形で身体障害児救済の事業に関係することを喜ぶであろう。しかし、国際ロータリーは気乗りしないロータリアンにこの種の事業に関係することを強制することは望ましくないと信じている。国際ロータリーはまた、ロータリークラブやロータリー会員が、身体障害児救済事業のような立派な仕事でも、これに全く夢中になったために、ロータリークラブの真の役割が忘却され、ロータリーの基本的で特色ある目的が見失われ、また忘れられるならば、それは望ましいことでもないし、またロータリー福祉のためにもならないと考えている」

理事会決議はさらに三転四転し、1923年のセントルイス大会において決議23－8、「障害児並びにその救助活動に従事する国際的組織を支援せんとする障害児救済に関する方針採択の件」を、提案する姿勢を示します。これは積極的に身体障害児対策を推奨するとともに、その費用を援助するために、RI中央事務局が年間1ドルの特別人頭分担金を徴収することを定めたものであり、もしもこれが決議されれば、理論派の反論が強まって収拾がつかない状態になることが懸念されましたが、同時に決議委員会のウイル・メーニャによって提案された決議23－34の成立と引き替えに撤回されて、この論争に終止符が打たれることになるのです。

決議23－8で障害児問題に積極的な実践派に、おおいに理解あるところを見せておきながら、巧妙に決議23－34とすり替えることによって、相反する議論を調和させた理事会の高等戦略といいましょう。この時点において、もし決議23－34の成立がなかったら、ロータリーは理論派と実践派とに分裂し、今日のロータリーは存在しなかったに違いありません。

決議23－34の原文には、「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの原則」というサブタイトルが付けられ、ロータリー運動全般にわたって、奉仕の実践をめぐる、個人奉仕か団体奉仕かに対する長い論争に終止符を打つものであると同時に、RIとクラブとロータリアンの機能を明確化し、ロータリアンとクラブがおこなうロータリー諸活動に関する根源的な指針となるのです。

セントルイス大会で決議された最初の決議23－34は、その後いくつかの項目について部分的に改正され、そのタイトルも「社会奉仕に関するロータリーの方針」と改正されて、現在の形になっています。

採択された当初のタイトルが、「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの原則」であったことからも分かるように、単に社会奉仕に関する指針として定められたものではなく、ロータリーの全ての活動に関する指針であったことに着目しなければなりません。

ロータリーの奉仕活動を、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕に分ける四大奉仕が採用されたのは1927年であり、決議23－34が最初に採択された1923年には、未だ社会奉仕という分類は存在していませんでした。1926年のデンバー大会において、この決議のタイトルが「社会奉仕に関するロータリーの方針」と改正されて初めて社会奉仕Community Serviceという言葉が登場しますが、ここで使われているCommunity Serviceは「個人生活、職業生活、社会生活、全般にわたって奉仕の理想を適用する」と定義づけられており、現在われわれが使っている、狭義の社会奉仕よりはるかに広い範囲を指していることが分かります。

ロータリーの奉仕概念をロータリー運動の実態に即して説明するとき、理論と実践に分けると理解がしやすくなります。理論はロータリー思想であるとともに、ロータリー哲学です。具体的にいうと、ロータリークラブという組織を介して学ぶ「奉仕の心の形成」であって、それは親睦につながります。これを欠くとロータリー運動は成立しません。実践は行動であり、ロータリアンが個人でおこなう「奉仕の実践」を意味するものです。

ロータリー運動とは、「一業一会員」で選ばれた良質な職業人であるロータリアンが、毎週一回定例の会合に集い、例会を通じて「奉仕の心」を学び、その心を持ち帰って、ロータリアン個人の立場でそれぞれの家庭や地域社会や国際社会で「奉仕の実践」を移すことです。理論と実践は車の両輪のごとく、バランスをとって回らなければなりません。

この考え方は本質的には正しいのですが、実践の主体がロータリアンであることは定義づけられていたとしても、ロータリークラブがおこなう「奉仕の実践」についての理論づけに欠けており、当時の論争の焦点はまさにその点にあったのです。

決議23－34の特徴は、ロータリー運動全般を対象として、ロータリー哲学を定義し、ロータリークラブと国際ロータリーの機能分担を明らかにするとともに、「奉仕の実践」に関するロータリアンとロータリークラブと国際ロータリーの原則を明確に区分し、確定したことにあります。

《決議23－34》
（社会奉仕における1923年の声明）
ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンの全てがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。
この奉仕の理想の適用を実行することについては、多くのクラブが会員による奉仕にその機会を与えるものとして、さまざまな社会奉仕活動を進めてきている。以下に掲げる諸原則は、ロータリアンおよびロータリークラブの指針として、また、社会奉仕活動に対するロータリーの方針を明確に表わすものとして適切であり、また管理に役立つものであることを認め、これを採用するものである。

（1）ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕－「超我の奉仕」－の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践倫理の原理に基づくものである。

（2）本来ロータリークラブは、事業および専門職務に携わる人の代表として、ロータリーの奉仕の哲学を受け入れ、次の四つのことを実行することを目指している人々の集まりである。第一に、奉仕の理論が職業および人生における成功と幸福の真の基礎であることを団体で学ぶこと。第二に、自分達の間においても、また地域社会に対しても、その実際例を団体で示すこと。第三に、各人が個人としてこの理論をそれぞれの職業および日常生活において実践に移すこと。第四に、個人として、また団体としても大いにこの教えを説き、その実例を示すことによって、ロータリアンだけでなく、ロータリアン以外の人々の全てが、理論的にも実践的にも、これを受け入れるように励ますことである。

（3）国際ロータリーは次の目的のために存在する団体である。
a）ロータリーの奉仕の理想の擁護、育成および全世界への普及；
b）ロータリークラブの設立、激励、援助および運営の管理；および
c）一種の情報交換所として、各クラブの問題を研究し、また、強制でなく有益な助言を与えることによって各クラブの運営方法の標準化を図り、社会奉仕活動についても、すでに広く多くのクラブによってその価値が実証されており、国際ロータリー定款に掲げられているロータリーの綱領の趣旨にかない、これを乱すような恐れのない社会奉仕活動によってのみ、その標準化を図ること。

（4）奉仕するものは行動しなければならない。したがって、ロータリーとは単なる心構えのことをいうのではなく、またロータリーの哲学も単に主観的なものであってはならず、それを客観的な行動に表わさなければならない。そして、ロータリアン個人もロータリークラブも、奉仕の理論を実践に移さなければならない。そこで、ロータリークラブの団体的行動は次のような条件の下におこなうように勧められている。いずれのロータリークラブも、毎年度、何か一つの主だった社会奉仕活動を－それもなるべく毎年度異なっていて、できればその会計年度内に完了できるようなものを、後援するようにすることが望ましい。この奉仕活動は、地域社会が本当に必要としているものに基づいたものであり、且つ、クラブ全員の一致した協力を必要とするものでなければならない。これは、クラブ会員の地域社会における個々の奉仕を奨励するためにクラブが継続的に実施しているプログラムとは別におこなわれるべきものとする。

（5）各ロータリークラブは、クラブとして関心があり、またその地域社会に適した社会奉仕活動を自主

的に選ぶことについて絶対的な権利をもっている。しかし、いかなるクラブも、ロータリーの綱領を無視したり、ロータリークラブ結成の本来の目的を危うくするような社会奉仕活動をおこなってはならない。そして国際ロータリーは、一般的な奉仕活動を研究し、標準化し、推進し、これに関する有益な示唆を与えることはあっても、しかし、どんなクラブのどんな社会奉仕活動にせよ、それを命じたり禁じたりすることは絶対にしてはならないものとする。

（6）個々のロータリークラブの社会奉仕活動の選択を律する規定は別に設けられていないが、これに関する指針として以下の準則が推奨されている。：
a）ロータリーの会員の数には限りがあるので、ロータリークラブは、市民全体の積極的な支持なくしては成功しえないような広範囲な社会奉仕活動は、他に地域社会全体のために発言し、行動する適切な市民団体などの存在しない土地の場合に限り、これをおこなうこととすべきであり、商工会議所のある土地では、ロータリークラブはその仕事の邪魔をしたり、横取りをしたりすることのないようにしなければならない。しかし、ロータリアンとしては、奉仕を誓い、その理念の教えを受けた個人として、その土地の商工会議所の会員となって活躍すべきであり、また、その土地の市民として、他の善良な市民と一緒に、広く全ての社会奉仕活動に関与し、その能力の許す限り、金銭や仕事の上でその分を果たすべきである。
b）一般的にいって、ロータリークラブは、どんな立派な事業であっても、クラブがその遂行に対する責任の全部または一部を負う用意と意志のない限り、その後援をしてはならない。
c）ロータリークラブが奉仕活動を選ぶ場合に宣伝をその主たる目標としてはならないが、ロータリーの影響力を拡大する一つの方法として、クラブが立派に遂行した有益な事業については正しい広報がおこなわれるべきである。
d）ロータリークラブは、仕事の重複を避けるようにする必要があり、総じて、他に機関があり、それによってすでに立派におこなわれている事業に乗り出すようなことをしてはいけない。
e）ロータリークラブの奉仕活動は、なるべく既存の機関に協力する形でおこなうことが望ましいが、現存機関の設備や能力が目的の遂行に不十分である場合には、必要に応じ、新たに機関を設けることにしても差し支えない。
ロータリークラブとしては、新たに重複した機関を作るよりも、現存の機関を活用することのほうが望ましい。
f）ロータリークラブはその全ての活動において、宣伝者として優れた働きをし、多大の成功を収めている。ロータリークラブは地域社会に存在する問題を見つけ出すことはしても、それがその地域社全体の責任にかかわるものである場合には、単純にそれに手を下すようなことはしないで、他の人々にその解決の必要を悟らせる努力をし、地域社会全体にその責任を自覚させて、この仕事がロータリーだけの責任にならないで、本来その責任のある地域社会全体の仕事になるようにしている。また、ロータリーは、事業を始めたり、指導したりするが、一方、当然それに関心をもっていると考えられる他の全ての団体の協力を得るように努力すべきであり、そして、当然ロータリークラブに帰すべき功績であっても、それに対する自分のほうの力を最小限度に評価して、その全てを協力者の手柄にするようにしなければならない。
g）クラブがひと固まりとなって行動するだけで足りるような事業よりも、広く全てのロータリアンの個々の力を動員するもののほうがロータリーの精神によりかなっているといる。それは、ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである。

決議23－34をクラブによる団体活動を禁止した決議と受け取る人もいますが、それは間違です。奉仕の実践はロータリアン個人がおこなうことが原則ですが、クラブが会員の教育的効果を狙って実施する社会奉仕活動を制限するものではありません。この誤解を解き、ロータリークラブ、ロータリアンともに奉仕活動に参加することを要請するために、RIは1941年に「奉仕活動への参加」を決議し、さらに1963年に「クラブと地区の社会活動への参加」を決議しています。

《クラブと地区の社会奉仕活動への参加》（1963年）

地域社会のニーズに対して、政府及び民間の諸団体が活動しているが、しかし、ロータリークラブやロータリアンが地元地域社会において効果的且つ重複しない奉仕を引き受ける各種やりがいのある機会が依然として存在する。効果的な社会奉仕をする基礎として、ロータリークラブ会長は、人間尊重、地域発展、環境保全、協同奉仕、の社会奉仕小委員会の委員を務めるロータリアンを任命するよう奨励されている。この小委員会は、次のことをおこなうよう要請されている。
1）地区内のそれぞれの地域の特定の相対的状況を総合的に調査、分析し、地域社会のニーズを確認する。
2）地域社会のニーズを見いだすために個人的、また職業上の立場を生かしてクラブの区域内を探り、社会奉仕委員会の調査、分析を補足、強化するよう個々のクラブ会員に勧める。
3）他の地域団体との会合を、所定の方針に合致しておこなうことができる場合、そのような会合を開き、話し合いと意見の交換をする。
4）地域社会のニーズに積極的に関心を示し、これに精通していることを会員候補者選考の一要素に含める。

決議41－8によって現在有効な決議と認定されているのにもかかわらず、再三にわたって、決議23－34を撤廃ないしは改正しようとする提案が規定審議会に提出されています。さらに1984年版の手続要覧から決議23－34が削除されるという事態さえ起こりました。改正しようとする提案の多くは、社会奉仕における団体奉仕の枠を拡大しようとするものでしたが、激しい討論のすえ、1986年および1989年の規定審議会において、なんとか否決されて現在にいたっています。

決議23－34は単に社会奉仕の枠組のみを定めた規約ではありません。すでに述べた通り、ロータリーの哲学、ロータリークラブと国際ロータリーとの定義とそれぞれの役割、奉仕の実践に関する詳細を定めた基本的なドキュメントなのです。ロータリーの哲学に基づいた奉仕の実践の基本姿勢の確認であり、この枠を無制限に拡大したり撤廃することは、単に社会奉仕のみならず、ロータリー運動そのものを揺るがすことになりかねないのです。

多様化する社会的、国際的ニーズに対応するために、効率よく大規模プロジェクトを完遂しようとすれば、ロータリアン個々の自覚を促して、動きだすのを待つよりも、RIや地区やロータリークラブがイニシアティブをとって、集団的且つ金銭的に奉仕活動をするほうがてっとり早いかもしれません。しかし、それをあえて否定してきたところに、ロータリーが他の奉仕クラブと一線を画する特徴があるのです。

1988年、RI理事会は決議23－34を残す代償として、厳しい条件付きながら、「地区とロータリークラブの他団体との協力」を決議し、ロータリーの理想と目的に合致すれば、クラブや地区が他の団体と共同で事業をしてもよいという決議をしました。地区をクラブと共に奉仕活動の実施母体に位置づけた、明らかに決議23－34に抵触するドキュメントです。

《地区とロータリークラブによる他団体との協力》
地区とロータリークラブは、次のことを定めたプロジェクトと活動において、他団体を支援し、他団体と協力することができる。
1）ロータリーの理想と目的に沿って着手すること。
2）関係クラブまたは地区内の会員がこの強力活動を承認していること。
3）活動の継続期間中クラブ会長またはガバナーの任命したロータリー委員会が直接協力し、責任を負うこと。毎年見直すこと。
4）独立した組織体としてのクラブまたは地区の自主性を保持すること。
5）ロータリーとその奉仕活動を一般の人々に知らせるために、協力という性格の範囲内で、クラブまたは地区が適切な形で認められること。
6）クラブまたは地区と協力団体とが合同プロジェクトの性格を一般の人々に伝達するという協同責任を負うこと。
7）クラブまたは地区は、合同プロジェクト参加にあたって継続的義務を引き受けないこと。

8）クラブまたは地区は、他団体への継続的財政義務を引き受けないで、地区内のロータリークラブに対して、地区大会その他の適切な手段により、このようなプロジェクトまたは活動への継続的支援を検討し、決定を下せるような機会を提供すること。
9）クラブまたは地区は、協力団体のメンバーとならないこと。
10）クラブと地区は、他団体にクラブ名簿またはロータリアン名簿を提供したり、他団体に資料を配布したりしないこと。ただし、ロータリープログラムのためになるような具体的目的（募金を含まない）のある場合を除く。

1992年の規定審議会で、社会奉仕に関する新声明として決議92－286が採択されました。これは、決議23－34と共に使用されるというただし書きがついてはいるものの、個人奉仕と共にクラブの団体奉仕を推奨し、さらにRIが積極的に奉仕の実践例を提案することが明記されています。RIの権限を強め、ロータリー運動を徐々にではあるが、団体奉仕が可能な方向に軌道修正しつつあることが伺われます。

《社会奉仕に関する1992年の声明》
1992年規定審議会は、社会奉仕に関する次の声明を採択した（国際大会決議23-24、以後改正されたものとともに使用されるべきものである）。

ロータリーの社会奉仕とは、ロータリアン一人一人の個人生活、事業生活、社会生活に奉仕の理想を適用することである。
この奉仕の理想を実効するにあたっては、各ロータリークラブが多彩な社会奉仕活動を開発して、多くの会員による奉仕活動に輝かしい機会を与えてきた。ロータリアンの心構えとして、また、社会奉仕活動に関するロータリーの方針を明確にするために、その原則は次のようにまとめられる。
社会奉仕は、ロータリアン一人一人が「超我の奉仕」を実証する機会である。地域に住む人々の生活の質を高め、公共のために奉仕することは、全てのロータリアン個人にとっても、またロータリークラブにとっても献身に値することであり、社会的責務でもある。
この精神に立脚して、各クラブに対し次のように勧奨する。
1）地域社会における奉仕の機会を定期的に調査し、各クラブ会員と地域のニーズを検討させること。
2）社会奉仕プロジェクトを実施するにあたっては、会員の得意とする職業上の能力や趣味の力を活かすこと。
3）どのようにささやかであっても、あらゆる社会奉仕活動が重要であると認識した上で、地域のニーズを汲み、地域内のクラブの立場や力量を勘案してプロジェクトを始めること。
4）各種社会奉仕活動を秩序立てるために、ロータリークラブが提唱するインターアクトクラブ、ローターアクトクラブ、ロータリー村落共同隊、その他のグループと緊密に協力すること。
5）国際レベルのロータリープログラムと活動を通じて社会奉仕プロジェクトを強化する機会を確認すること。
6）社会奉仕プロジェクトの実行にあたっては、望ましく、また、実現可能な限り、必要とされる資金や人材の提供までも含めて、地域社会にも参加を求めること。
7）社会奉仕の目標を達成するために、RIの方針に沿って他団体と協力すること。
8）社会奉仕プロジェクトが一般社会の人々に十分認められるようすること。
9）社会奉仕活動において他の団体の協同参加を促進する触媒としての役割を果たすこと。
10）もしそれが適当であるならば、公共組織、奉仕団体、その他諸団体に、継続中のプロジェクトを委譲すること。そうすれば、ロータリークラブは新プロジェクトに携わることが可能となる。

RIは、ロータリークラブの連合体として、社会奉仕のニーズや活動を伝え、広め、且つロータリーの綱領を推進し、参加を望むロータリアンやロータリークラブ、地区の力を結集すれば役立つと思われるプログラムやプロジェクトを適宜提案する責務を負っている。

↑概論トップ

←BACK″奉仕の拡大 −職業奉仕− ″ NEXT ″奉仕の拡大 −国際奉仕−″→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集 Ⅰ
・職業奉仕講演集 Ⅱ
・職業奉仕講演集 Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第9章

奉仕の拡大 −国際奉仕−

全世界にロータリーが拡大していったちょうどその頃1914年に第一次世界大戦が勃発しました。アメリカがドイツに宣戦布告をしたのが1917年でした。このような状況下で、イギリスやアイルランドのロータリークラブは、ヨーロッパ各地で傷ついた兵士の慰問や、避難民救済などの事業を手がけるようになりました。当時、国際奉仕の概念がロータリーに存在せず、社会奉仕の一類型として奉仕がされていました。一方シカゴクラブは、ドイツへの宣戦布告後、従軍兵士の慰問等の諸活動を企画立案するために、戦争問題担当委員会ができました。この委員会は兵士の激励や慰問だけでなく、ドイツ系アメリカ人への国内での虐待に対する救済もおこない、人類愛に根ざした奉仕活動をおこないました。このようにして、ここに国際奉仕の一分野が開かれました。

さて、第一次大戦がもたらした大きな荒廃、不幸は、世界の人に二度と同じようなことを繰り返さないという願いとなりました。そして、ロータリーの奉仕の理念の追求がもたらした重大な成果は、国境を超えた奉仕活動が戦争を防止し、国際親善のために有意義なものたりうるという発見でした。国際奉仕の概念が明確にロータリアンの意識にあがったのは、1919年のソルトレイクシティ大会のことでした。1921年のスコットランドのエジンバラで開催された国際ロータリー大会では、国際奉仕の目的が「世界平和」の樹立であるとの自覚が生まれ、このことを綱領に明文化すべきことを決議し、1922年のロサンゼルス大会で、ロータリーの綱領の中に、国際奉仕に関する部分が明確に規定されたのです。

「奉仕の理想に結ばれた事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって国際間の理解と平和を推進すること」
では、国際奉仕にはどういうことが考えられるのでしょうか。まず第一に、諸外国の事情を理解し、外国ロータリアンがその奉仕活動の範囲内において、相手国民のためになることができないかというところから思索が始められなければなりません。ここでも、社会奉仕の場合と同じように、ロータリークラブでできないようなプログラムに手をつけるべきではありません。国際間の問題というものは一つのロータリークラブの財力をもってしては如何ともしがたい要素をもっています。この場合には国家とか赤十字社等に依存するほかないと考えます。それではどのようなことができるのかというと、たとえばニュージーランドのニューマーケットクラブは、そのクラブの財源の中の一部をインドの貧民救済用ミルクにして毎年送っているし、第二次大戦後にアメリカのクラブが敗戦国民に対して、図書、衣料等の救済物資を送ったこともあります。また、国際奉仕が国家またはその他の団体によっておこなわれている場合、ロータリークラブはこれを側面から援助することができます。

第二に、国際親善と友好はしばしば国家間の会議の中から生まれる場合があります。ここで困難な問題は、ロータリーは一切の政治上の論争の圏外に立つべしとする大原則との関係をどうするかということです。国際ロータリーは理事会の決議をもって次のように宣言しています。

「国際ロータリーは、多数の国に存在する幾多の見解をもつクラブから成り立っている。故に政治的問題に関しては、国際ロータリーによってなんら団体行動をとったり、意見を述べるようなことはしない」

しかし国際理解と親善の確立に関して、国家と国家の代表に話し合いの機会を提供することはできるでしょう、まさしく話し合いの重要性はロータリー運動の中核的要素であって、話し合えば、人と人とはおのずから相和するのです。このようにして、政治問題に口をはさむことなく、国際紛争を惹起しそうな問題についての国際会議の設定をロータリークラブが主催し、その政治的論争の可否については言及しないという奉仕活動の分野が存在します。「あなた方にはそれぞれの言い分があるでしょう。その言い分をつき合せて、理詰めで話し合ったらどうですか、場所と会場設営はいたします」という態度なのです。

国際奉仕の分野で断然頭角を現しているのが、1917年の「ロータリー財団」の設置です。これは、当時国際ロータリー会長であったアーチ・C・クランフの提唱によるもので、国際理解と、親善増進のための基金の設定をおこなうことになり、ミズリー州のカンサス・シティクラブが26ドル50セントの最初の献金をしたことに始まります。これが1928年のミネアポリス大会になって、5739ドルに達し、現在のロータリー財団となり、種々の学生の国際交流の援助金支給をおこなっています。

ロータリー財団の目標は、国際レベルの人道的、教育的プログラムを通じて、世界理解と平和を達成することであり、これらのプログラムに対して資金を提供することを目的としています。ロータリー財団は、国際ロータリー理事会の下部組織として、主として数名の元国際ロータリー会長によって構成される委員会が、世界各国のロータリアンからの寄付金と国際ロータリー理事会が国際ロータリー大会の決議によって、割り当てた国際ロータリー余剰金とをもって構成する寄付行為であって、委員会はこの基本財産を運用し、その一部を博愛、教育、慈善、学術研究の目的のために支出します。これが画期的な事業を起こしたのは、1947年ポール・ハリスの死後、世界中のロータリアンが彼を追悼して寄付を寄せました。そしてポールの偉業を記念して奨学制度を開始したのです。現在次のような8種類のプログラムによって目標の遂行に役立てています。(1)国際親善奨学金(2)同額補助金(3)研究グループ交換(4)保険飢餓追放および人間性尊重補助金(5)開発途上国で奉仕する大学教員のためのロータリー補助金(6)ロータリーボランティア(7)ポリオプラスプログラム(8)ロータリー平和プログラムです。

今までおこなわれてきた国際奉仕の大多数は、国家と国家の紛争、すなわちその最大のものが戦争、を前提とした平和運動でした。したがって、第二次大戦が終結した直後に、第三次世界大戦に連なりかねない国際緊張が発生するや、ロータリアンの心痛もこの点に集中して、1951年の国際ロータリーが「世界平和樹立のための国際奉仕の8原則」を宣言したり、それの実践を解説した「平和への7つの道」という著書が出版されました。

しかし、1960年頃になると、今日の世界には国家と国家との力の対立とは次元が異なる重大な問題が存在するという自覚が生まれました。そしてロータリー運動もまたその問題と無関係ではいられなくなりました。

その問題は地球上に存在する富の格差から発生する問題です。国際経済学者の指摘によると、今日の地球上の富の70パーセントが、わずか30パーセントの先進国民によって独占されていて、この30パーセントの先進国民は、主として北半球に住んでいます。そして残りの30パーセントの富は、70パーセントの発展途上国民にしか与えられていません。しかもこれらの国にあっては、その富はごく小数の支配階級の手に握られている結果、一般大衆が人たるに値する生活が保障されるような富の配分は全くおこなわれていません。そのため、これらの国民は自治意識も低く、相互の連帯感の欠如から経済的にも社会的にも文化的にも自立することができません。他方、これらの国々における人口増加は目覚ましいものがあります。この状態が続けば、やがて世界中に食料危機が襲うことになりかねません。

そこで、先進国民が自己の能力に応じて、自ら身を挺して、それらの国に出向き、そこの国民といっしょになって、産児制限等の公衆衛生知識、農業用灌漑技術、初等教育、自治社会形成、中小企業相談など諸々の分野で共同活動をおこなうような奉仕活動が必要になってきます。

このような国際社会における広域的な奉仕活動は、ロータリーのような超国家的組織が必要となってきます。ただ、この種の作業の育成については、いくつかの段階での準備が必要でした。

1963年のRI会長カール・ミラーは「組み合わせ地区」という制度を作り、世界中の地区と地区とを組み合わせ、その地区内のロータリークラブ同士に相互に文通をおこなわせ、互いに情報交換をおこなう内に、それぞれの問題をとらえて、国際奉仕の計画を実現させようとしました。さらに1967年のRI会長エバンスは「世界社会奉仕World Community Service」という新しい奉仕の実践活動を提唱し、全世界のロータリークラブに、地球は国家の対立を超えて一つの地域社会であるとの基本認識に立って、後進国民の援助要請を国際ロータリーに登録させ、これに先進国のロータリークラブが応ずるという制度を設けたのです。

この世界社会奉仕のプログラムを推進する場合に、ロータリー運動の本質との関係で一つだけ気になることがあります。それは、この種の問題の提唱に夢中になるあまり、国際ロータリーが特定の事業の実施主体となりはしないかという問題です。国際ロータリーが本来もっている役割は、クラブ間の情報の媒体にすぎません。1979年にRI会長クレル・レヌーフが提唱した3Hプログラム（Health 保健、Hunger 飢餓追放、Humanity 人間性尊重）は全世界のロータリアンとクラブから一定金額の拠出金を求め、国連と連携してフィリピンのポリオの撲滅に協賛しようというものでしたが、全世界のロータリアンの約60パーセントの拒絶を受け、目的を達成することができませんでした。

国際ロータリーは、全世界のロータリークラブが会員となっている連合組織体であって、その主要な任務は連絡調整機能であって、事業を提唱したり、実施母体になることはできない団体です。世界社会奉仕そのものになんら問題はありません。あくまで実施母体となるのはロータリアンまたはクラブであることを念頭においておく必要があると思われます。
現在RIが規定しているロータリアン、ロータリークラブの責務は以下の通りです。

《国際奉仕におけるロータリーの基本方針》
ロータリーの国際奉仕の目指していることは、奉仕の第４部門に表現されている；すなわち「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進する」（RI定款第4条；標準定款第3条）自由、正義、真実、宣誓の神聖、人権尊重は、ロータリーの原則に本来備わっているものであり、また、国際平和と秩序の維持および人類の発展に不可欠である。
国際奉仕は、概念上、次のような四つの一般的分野に分類できる。
１）世界社会奉仕活動
２）国際レベルの教育および文化的交流活動
３）特別月間と催し
４）国際的な会合

《個々のロータリアンの責務》
ロータリアンは、それぞれ、奉仕の第４部門に込められている理想の達成に寄与するよう期待されている。各ロータリアンは、自国の忠実且つ勤勉な市民となるよう期待されている。各ロータリアンは、場所を問わず、個人として尽力し、視野の広い世論を作り出すよう助力すべきである。このような世論は、必然的に、あらゆる国の人々の間に国際理解と親善を増進しようとする政府の政策に影響を及ぼすであろう。
世界に目を向けるロータリアンは
１）愛国主義にとらわれず、自分が、国際理解と親善と平和を推進するという責務を共に負っているものとみなす。
２）国家的または人種的優越感によって行動しないようにする。
３）他国民と協調する共通の基盤を求め、これを育成する。
４）思想、言論、集会の自由、迫害と侵略からの解放、欠乏と恐怖からの解放を享受できるように、個

人の自由を守る法律と秩序を擁護する。
5）どこかが貧困であれば、全体の豊かさを危うくすると認識し、あらゆる国の人々の生活水準を高めようとする措置を支援する。
6）人類に対する正義の原則を高くかざす。この原則は基本であり、世界的なものでなければならないと認識する。
7）国家間の平和を推進しようと常に努め、この理想のためには個人的犠牲を払う覚悟をする。
8）実践されれば、必ず豊かで充実した人生をもたらす。倫理的・精神的基本水準が存在すると認識しながら、国際親善の一歩として、あらゆる他の人々の信念を理解する心をかき立て、これを実践する。

《ロータリークラブの責務》
ロータリークラブは、政府や世界問題あるいは国際間の政策に影響を与えるような団体行動をとってはならない。しかし、個々の会員に対して、事実をわきまえた建設的な心構えをもつよう奨励しなければならない。
ロータリークラブで、討論会を開催して、公共の問題を論じても差し支えない。ただし、そのような場における一連の措置は、奉仕の第4部門を助長するものでなければならない。もし論争点のある場合には、双方の主張が十分に発表されることが肝要である。

　RIの方針としては、ロータリークラブが核時代や貿易などの国際問題を公平な立場で討論するプログラムを退けるものではない。これらの問題は、平和の追求という範囲内において真剣に考え、討議するにふさわしいテーマである。
ロータリークラブにおいて国際的な論題を取り上げる場合、論者に他国の国民を攻撃しないように注意してほしい。また会合において表明された個々の論者の意見に対しては、ロータリークラブは必ずしも責任を負うとは限らないことを明らかにしておかなければならない。

　ロータリークラブは、国際問題に関係をもつ特定の計画に関するいかなる決議をも採択してはならない。ある国のクラブから他の国のクラブ、国民あるいは政府に対して何らかの行動をとることを要望してはならないし、また、特定の国際問題の解決に関する計画案や意見書を配布してはならない。

　ロータリークラブが存在する国家間の関係が緊迫している場合には、悪意や誤解を増すことがないように、関係国および他の国々クラブは、細心の注意を払わなければならない。
ロータリークラブとロータリアンは、なお一層の努力をして、世界中の人々の間に理解と親善を奨励・助長するよう要請されている。常にRIの所定の方針を守ること、また、誤解を生じ、悪意を生み、平和達成と維持への努力を後退させるような行動、発言、通信、文書は躊躇することなく避けること。

↑概論トップ

←BACK"奉仕の拡大 –社会奉仕–"　　NEXT "綱領の変遷"→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集 Ⅰ
・職業奉仕講演集 Ⅱ
・職業奉仕講演集 Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第10章

綱領の変遷

シカゴクラブの定款・細則が定められたのは1906年1月のことでした。クラブ創立1周年の前で、起草委員に任命されたのは3名でした。すなわち、ポール・ハリスとマックス・ウォルフの二名の法律家と保険業のチャールズ・A・ニュートンでした。この3人の作業は非常に優れていたので、その表現は今日のものにもその痕跡を残しています。

第1条 会員の業務上の利益を振興すること。
第2条　性質として社交クラブに伴う親睦、その他望ましい諸点を振興すること。

つまり会員の相互扶助と親睦がロータリーの目的でした。親睦は社交団体の共通的性格ですから、ロータリークラブの特質は会員相互扶助にあるといってもいいでしょう。これをロータリーの「互恵主義」と呼んでいる人もいます。
それでは会員の相互扶助、互恵主義とは具体的どういうことかというと、これは会員相互の取引を義務づけたことでした。会員が石炭を欲しいといえば、シルベスター・シールから買い、洋服を仕立てたいというときには、ハイラム・ショーリーから作るといったように、会員相互が親類付合いの中で、しかも原価での取引をしていました。しかしながら、これに対して反省が与えられたのが、弁理士ドナルド・カーター事件です。2代目会長アル・ホワイトが友人のドナルド・カーターにロータリークラブ入会を勧めたところ、カーターは互恵主義の説明を聞いて、即座に入会を断りました。その理由は、この種の活動はクラブ内部の利益交換にすぎず、対社会的意義に欠けているから、これだけに終始するクラブに将来性はなく、また意義も認められないということでした。アル・ホワイトからこの報告を受けたポール・ハリスは直ちに定款改定を提案し、綱領の第3条を付け加えることになりました。

第3条 シカゴ市の利益を推進し、その市民の中に市民としての誇りと忠誠心を普及すること。

ここに始めてロータリーは、漠然とした対社会的目的を自覚するにいたったのです。
そこで各地のクラブは、1906年1月にできたシカゴクラブの綱領をそのまま規定しましたが、唯一の相違は、第3条のシカゴ市という箇所が各クラブの所在都市名に置き換えられただけでした。
1910年に全米ロータリークラブ連合会が結成されたとき、連合会定款に次の5ヶ条からなる綱領が採択されました。この時以降、全米ロータリー連合会が、国際ロータリー連合会と発展していきますが、定款は連合会のものと、各クラブのものとの二種類があり、それが1922年に統一され一つとなるのです。

第1条　アメリカ合衆国におけるロータリークラブの加入する組織 によって、ロータリーの原則を拡大発展せしめること。
第2条　全アメリカ合衆国内加入ロータリークラブの業務と原則を 統一すること。
第3条 市民としての誇りと忠誠を喚起し且つこれを奨励すること。
第4条 進歩的で尊敬すべき商取引の方法を推進すること。
第5条　加入ロータリークラブ個々の会員の商業上の利益を増進すること。

この綱領で職業上の道義昂揚に着目したのは一つの進歩でした。
1912年に全米ロータリークラブ連合会が、国際ロータリークラブ連合会となったとき綱領は次の4ヶ条にまとめられました。

第1条 ロータリーの原則を標準化し、その地方的事情に適用しうる範囲内において、全ロータリークラブがこれを採用するよう奨励すること。
第2条 世界中の全ての商業中心地にロータリークラブの結成を奨励し発展せしむること。
第3条 現存ロータリークラブの業務と所属会員及び地域社会に及ぼす価値を研究し、その得た情報を全世界ロータリーの利益のために発表すること。
第4条 親睦の高萬なる精神と、異なった市及び国のロータリアンである職業人間の利害を加盟クラブ間に推進すること。

この時各クラブに対する共通の定款が必要となり、5ヶ条からなる模範的クラブ定款が承認されました。

第1条 全ての合法的職業の価値に対する認識を深め、社会に対する奉仕の機会を与えるものとして会員の職業を神聖化すること。
第2条 職業上の高き道徳的倫理基準を奨励すること。
第3条 意見や商取引上の方法を互いに話し合い、各会員の能率を増進すること。
第4条 奉仕の機会及び成功への道として話し合いを深めるための知識を普及すること。
第5条 社会福祉の問題に各会員の関心を促し且つ市発展のため他の人々に協力すること。

次いで、1915年のサンフランシスコ大会においては国際ロータリークラブ連合会定款の綱領と、標準クラブ定款の両方の改正がおこなわれました。

まず国際ロータリー連合会定款の綱領は

第1条 ロータリーの原則および慣例に関する規制を造り且つこれを宣揚すること。
第2条 世界中の全ての商業中心地にロータリークラブの結成を奨励、推進、且つ監督すること。
第3条 現在のロータリークラブの業務とその所属会員及び地域社会に及ぼす価値を研究し、その得た情報を全ロータリークラブの利益のために発表すること。
第4条 ロータリアン及びロータリークラブの間に広範な友好的情報を増進すること。

そしてクラブ定款は、第6条が加えられた。

第1条 あらゆる正業の価値の認識を促進し、且つ各会員の職業を社会に奉仕する機会を与えられたものとして、その社会的評価を高めること。
第2条 企業と専門職業の高度な倫理基準を奨励すること。
第3条 改良されたアイディアと企業経営の方法を開発することによって各会員の実力を増大させること。
第4条 各会員の願望を促進し、これを同僚や社会全体に奉仕したらしめること。
第5条 顧客の教育を奉仕の機会及び成功への手段として促進すること。
第6条 各会員の属する地域社会の公共の福祉に関し各会員がもっと関心を高め、且つ公共的、社会的、商工業的発展において他の者と協調すること。

次いで、1918年カンサス・シティ大会ではクラブの綱領の改定はおこなわれず、国際ロータリークラブ連合会の綱領中に1915年の各クラブの綱領を挿入する努力がみられ、その綱領は次ぎのように書き替えられました。

第1条 世界中の全ての商業中心地にロータリークラブの結成を奨励、推進、且つ監督すること。

第2条 地方的活動を除き、全ての加盟ロータリークラブの業務や活動を同格化、標準化し、且つ一般的な指導をなすこと。
第3条 自己の活動により、また、加盟ロータリークラブの媒介によって次ぎの事項を奨励育成すること。
(イ)職業上の高い道徳的倫理的基準
(ロ)価値ある事業の基盤としての奉仕の理想 (ハ)市・商業・社会及びその地域社会の道徳的福祉における各ロータリアンの活発なる関心br> (ニ)奉仕機会と同時に成功への援助としての広範なる知り合いの発展
(ホ)ロータリアンの能率及び価値増進の媒体として意見と商業取引の方法を交換
(ヘ)全ての合法的職業の価値についての認識と社会への奉仕の機会を与えるものとして各ロータリアンの職業の神聖化
第4条 全ロータリアンの独占使用と利益のための国際ロータリーの徴章、襟章、また他の紋章を造り、これを採用し且つ保有すること。

この改正によって、ロータリーの職業奉仕を明確にし、ロータリーの徴章を設定することが決定しました。
1919年のソルトレイクシティにおける国際大会では、国際ロータリー連合会の綱領を変えたわけではありませんが、その第3項の文句をそのまま第2条の目的のところにもっていきました。
1921年のエジンバラ大会で第4の綱領を第5とし、新たに第4の綱領を採択しました。

第4条 奉仕というロータリーの理想に結束した全ての国の職業人の交友を通じて国際平和と善意に助力すること。

ここで初めて、公然とロータリー活動の中に国際平和と善意の向上に努力することを取り入れたのであります。
1922年に国際ロータリー連合会は国際ロータリーと改称され、国際ロータリー定款もクラブ定款も同一綱領を定めることになりました。そして、この時以降設立される各ロータリークラブは標準クラブ定款の採択を義務づけられました。また綱領は次のように改正されました。

ロータリーの綱領は次ぎの事項を奨励且つ育成するにある。

第1条 全ての価値ある企業の基盤としての奉仕の理想
第2条 職業上の高い道徳的基準
第3条 各ロータリアンによるその個人、職業及び地域社会生活に奉仕の理想を適用
第4条 奉仕の機会としての知り合いの展開
第5条 社会に奉仕する機会として、全ての有用な職業の価値を認め、且つロータリアンによる自己職業の品格化
第6条 奉仕というロータリーの理想に結束した職業人の世界的友好により理解、親善及び国際的平和の増進

この大会において、これまで模範的定款と称していたものを標準定款と定め、クラブの綱領にも同一文句を採用することとし、前置文の「ロータリーの綱領は次ぎの事項を奨励且つ育成する」とあるのを「次ぎの事項を奨励且つ育成する」と置き換えることにしました。

1927年のオステンド大会において綱領第6条にあるロータリーという言葉を削除しました。したがって、綱領の第6条は「奉仕の理想に結束した職業人の世界的友好により理解、善意及び国際的平和の増進」と変わりました。
1935年のメキシコシティ大会で、6項目にわたる綱領は4項目に圧縮されました。そして、ロータリーの綱領と企画との間の直接的な関係を示すことになる4つの綱領として書き直されたのです。以前に制定した6つのものを、意味は大体同じで単に4つに集約されただけです。

The Object of Rotary is to encourage and foster the ideal ofservice as a basis of worthy enterprise and, in particular, toencourage and foster:
First. The development of acquaintance as an opportunity forservice;
Second. High ethical standards in business and professions; the recognition of the worthi???花????????･?ness of all useful occupations;and the dignifying of each Rotarian's occupation as anopportunity to serve society;
Third. The application of the ideal of service in eachRotarian's personal,business and community life;
Fourth. The advancement of international understanding,goodwill, and peace through a world fellowship of business and professional persons united in the ideal of service.

ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある。
第1 奉仕の機会として知り合いを広めること。
第2 事業及び専門業務の道徳的水準を高めること。あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること。そしてロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること。
第3 ロータリアン全てが、その個人生活、事業生活及び社会生活に常に奉仕の理想を適用すること。
第4 奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

これが今日用いられている国際ロータリー及びクラブ定款にあるロータリーの綱領で、本文と4つの補強原則から成り立っています。ここで、今日の綱領について詳しく解説しておきます。

まず本文ですが、企業の根底に通常は儲けを置くところですが、そこに奉仕を置くところが中心概念となります。企業組織体の目的は儲けです。ロータリーはこれを否定しません。ロータリーは儲けの金高を問題にしていません。それよりもロータリーはどのように儲けたのかが大事になってくるのです。ロータリーの奉仕という概念は第7章でも詳しく述べましたので、ここでは割愛させていただきます。

綱領補強原則第1「奉仕の機会として知り合いを広めること」とありますが、その持つ意味は生易しいものではありません。「心の友を得、もって奉仕の契機となすべきこと」と訳した方がわかりやすいのではないでしょうか。

ロータリークラブには、同業者排除の原則、言い換えれば一業一会員制と例会出席強制の原則、すなわち週1回の例会出席の義務、この二つがロータリークラブの核になる基本原則です。その一業一会員制で選ばれた代表的な職業人が、その良質な思考と良質な心を持って週1回の例会に集まり、親睦のうちに相和し友愛と信頼を深め、心の友を得ると同時に奉仕の心を養いあげて、世のため人のためにというのがロータリー発想の原理的なパターンです。このことが、心の友を得、奉仕の契機となすべきことにあたります。もう少し掘り下げて、良質な思考、良質な心とは一体どんな思考、どんな心でしょうか。

ロータリアンはそれぞれ異なった業種を持つ職業人です。そのロータリアンが、企業経営に専念することによって、いろいろな悩み、苦しみ、試行錯誤を重ねながら、自己の職業について信念と企業経営哲学を持つにいたります。同業者排除の原則によって、同業者にじゃまされることなく、開放的にそれぞれの他の職業人とその思考、心の交換がされます。それによって自己の企業を高め、企業の根底に奉仕を置くべしとする職業のあるべき姿を見いだすことができるのです。いうまでもなく思考、心の交換は例会出席によってなされます。互いの心を磨き、心の向上に役立ち、奉仕の契機になること、これがロータリーの親睦です。そしてこれが、綱領の補強原則第一になっています。

綱領の補強原則第2項は、次の3つの部分からなっています。
①互いに衆知を集めて企業の倫理的基準を高め???花????????･?ること。

②各職業は尊重されるべきであるという認識を深めること。
③各自が職業を通じて社会に奉仕するため、職業を品位あらしめること。
まず③項から説明いたしますと、「自己の職業をもって天職と心得るべきこと」と言い換えることができます。天職という言葉には若干宗教的な響きがありますが、ここでいう天職とは、自分の私利私欲のためだけに企業経営をするのではなく、世のため人のためにもしているのだという自覚を持つこと、そうすることによって誇りが生まれてきて、企業経営に品格がでてきます。このことが自己の職業をもって天職と心得るべきことになります。
②の項は、「職業に貴賤なしとの自覚を深めること」とした方が理解しやすいと思います。自分の職業は自分にとって天職であり、相手の職業は相手にとって天職です。天職と天職の間に価値の相違があるはずがありません。
どんな職業にも私的利潤を追求すると同時に、世のため人のためになる契機をはらんでいます。そういう自覚を持てば、いかなる職業間にも上下の区別はありません。すなわち職業に貴賤なしということです。
①の項は、補強原則第1で述べた親睦論と連結関係になっていますのであえて説明するまでもないでしょう。

以上第2項をまとめてみますと、自己の職業を自己の私的利潤追求の手段だけでなく、世のため人にためにも行っているという自覚とあわせて、社会的責任をも自覚し、職業を天職（自分の職業も他人の職業も全て天職）と考え、その天職と天職の間に貴賤なしとの認識を深め、そのような職業人が例会に集まり、親睦の中に心を磨き、相切磋琢磨することにより、企業の倫理的基準を高めていくことです。

補強原則第3は、ロータリー実践一般に関する原則です。補強原則第1、第2で心ができあがったら、その心をもって全ての生活で実践しなさいとこの項ではいっています。すなわち奉仕の実践です。ロータリアン一人一人がその家族生活、職業生活、地域社会生活に奉仕の心を実践するよういっています。ロータリーでは理念なき実践は奉仕の実践とはいいません。ロータリーの根本精神は奉仕の理想にあります。したがって、この奉仕の理想は我々の一切の生活の中に顕現されなければなりません。すなわち、一切の生活の中に奉仕の理想が適用されるというよりは、一切の生活が奉仕の理想の中に没入している姿が理想的です。奉仕の理想の中に、個人生活も職業生活も地域社会生活も没入すればよいのです。自分の心を奉仕という水の中にどっぷりとつけて、寝ても覚めても奉仕奉仕といわなくても、心が全てその状態になっていれば、自分の行動が全部奉仕の実践につながるのです。

最後に第4項ですが、これはまさしく国際奉仕に関する実践を著しています。コミュニティサービスを拡大していくことによって、終着点は全世界ということになります。すなわち、ロータリーの奉仕の哲学をつきつめていくと、人類平等の思想を広め、戦争再発を防止し、人類の平和と繁栄とに資するという大変重要な要素を自覚するにいたります。
ここで綱領というのは、国際ロータリー及びロータリークラブ定款第3条に示す原語のObjectのことです。このObjectの訳語についてはいろいろな意見がありましたが、あらゆる事情を考慮した結果、綱領ということになりました。また、綱領という言葉の原語Objectは従来複数で、Objectsとなっていましたが、1951年のアトランティック大会においてObjectと単数に定められました。すなわち、ロータリー綱領は奉仕の理想の普及においてその手段として、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕および国際奉仕の四つの部門に分かれていますが、あくまでもその心は奉仕の理想一つであるという意味からです。

↑概論トップ

←BACK”奉仕の拡大 −国際奉仕−” NEXT ”日本のロータリー史”→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集　Ⅰ
・職業奉仕講演集　Ⅱ
・職業奉仕講演集　Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第11章

日本のロータリー史

農耕民族としての歴史的背景から、集団行動と相互扶助を日常生活の中に取り込み、儒教や仏教に基づいた東洋哲学の影響を受けた日本人にとって、ロータリーの哲学は当然のこととして違和感なく受け止められると主張する人も多く、その一例として、二宮尊徳の教えは、ロータリー発生以前に既にロータリーの精神を説いているという人すらいます。

ロータリー哲学をある側面から見れば、その意見は正しいかも知れません。しかし、ロータリー哲学そのものは、資本主義経済がもたらした数々の悪弊を補正して、永続的な利潤を確保するために、アメリカの地で生まれた経営理論の哲学であることを忘れてはなりません。

我々が日本人として潜在的に抱いている儒教や仏教に基づいた奉仕の心も、キリスト教の教えに基づく奉仕の心も、ロータリーが説く奉仕概念とは似て否なる部分も多くあり、これを混同したり安易に解釈する処から、職業奉仕に関する誤解や、profitsを敢えて精神的なものに置き換える過ちが生まれてくるのです。

＜二宮翁夜話＞

お湯を手で己れの方に掻けば、湯はわが方に流れてくるように見えるがすぐ向こうに戻ってしまう。反対に湯を向こうへ手で押してやれば、やがて、わが方へ流れて帰る。少し押せば少し帰るし、強く押せば強く帰る。これが天理というものである。それ仁と言い、義と言うは向こうへ押すときの姿なり、我が方へ掻くときは不仁となり、不義となる。人体の組み立てを見よ、人の手は、我が方へ掻くことができるが、また向こうの方へも押せるようにできている。鳥獣の手は然らず、我が方へ取り込むのみ。ゆえに、他人のために向こうへ押すことを忘れるのは、人にして人に非ず、即ち鳥獣なり。あに恥しからざらんや。ただに恥しきのみならず、天理にそむくが故についに滅亡す。我れ常に奪うは益なく譲るに益あり。よくよく玩味すべし。

日本人のロータリー運動参加は大正初めの頃のことでした。三井物産の現地法人Southern Products がアメリカ合衆国テキサス州ダラスにあり、そこへ九州有田町出身である福島喜三次が社長として赴任していました。1915年、福島は友人に誘われて、ダラスロータリークラブのアディショナル正会員になりました。日本人初めてのロータリアンです。

1917年暮れに、日本はアメリカに目賀田男爵を団長として財政問題調査団を派遣しました。その中に当時三井銀行の重役であった米山梅吉が加わっていました。米山は、1918年の元旦を福島宅で過ごし、「メキシコの境まで咲く 枯野花」「テキサスの　野の東や 初日の出」他一句を詠んでいます。この時に米山は、福島からロータリー運動の話を聞き、さらに、ゲストとしてダラスクラブの例会に出席したといわれています。それらから、米山はロータリーに対する予備知識を充分身に付けていたであろうと思われます。

1920年1月、福島は東京転勤となりました。そのおり、ダラスクラブは彼の送別会を開き、その席で福島は日本にもロータリークラブを作るよう激励を受けました。この年の3月に国際ロータリー連合会会

長アルバート・アダムスから6月末までに日本にロータリークラブを作ることを条件に福島に特別代表を任命しました。そのため彼は米山梅吉と奔走しますが、当時日本にはロータリー運動に対する関心がなく、6月末までに創立に必要なチャーターメンバー数を集めることができず、期限切れとなってしまいました。期限の延長を国際ロータリーに申し入れたところ、エスタス・スネデコル連合会新会長は、パシフィック・メイル汽船会社横浜支店長のW・L・ジョンストンを共同特別代表に任命することを条件に、期限延長の申し入れを承認しました。そしてついに同年9月1日に東京クラブ創立委員会を、そして10月20日に24名のチャーターメンバーで東京クラブ創立総会を銀行クラブで開きました。初代会長に米山梅吉、初代幹事に福島喜三次が就任しました。

国際ロータリーのチャーター日付は1921年（大正10年）4月1日で、登録番号は855号でした。これが日本で初めてのロータリークラブ誕生の出来事です。なお、福島はわずか2回例会に出席しただけで、1921年3月に大阪に転勤になり、そこで大阪クラブの設立に関与した後、上海クラブ会員を経て、1932年10月、日本最初のパストサービス会員として東京クラブに再入会しています。

創立当初の東京クラブの特徴は、会員のほとんどが財界の大御所で占められていたことです。エリート中のエリートから選び抜かれた大企業の社長や、重役といった顔ぶれが並び、弁護士、医師などの自由業の会員は見当たりません。この最初の顔ぶれが前例となって、戦前の日本のロータリーは功成り名を遂げた財界人が入るクラブという錯覚を生み出し、さらに社会的地位とロータリアンの質を混同する過ちを冒すことになります。

会員が財界人であるがゆえ、金銭を介する「物質的相互扶助」の必要もなく、米山梅吉の方針によってロータリーの奉仕哲学の探究に真摯な態度で取り組み、個人奉仕の原則もよく理解されていた反面、クラブ組織としての管理運営はあまり省みられませんでした。例会日は毎月一回第二水曜日に開かれていましたが、これすらも流会となることが多く、出席率も悪く、また規約に対する関心も薄く、国際大会に代表を送ることもなく、奉仕活動などはほとんどなされていませんでした。

ところが、1923年（大正12年）9月1日、関東大震災が起こり、この時の国際ロータリーと全世界のロータリアンの友情と援助によって、東京クラブロータリアンはロータリー運動の何たるやを初めて知らされました。9月4日には国際ロータリー会長ガイ・ガンディガーからの励ましの電報が、さらに翌日には、救済基金として、25,000ドルの送金がありました。この義援金は、国際理解と親善のための基金として貯めていたアーチクランフ基金（現在のロータリー財団の前身）を取り崩したものという説と、RIの災害基金から支出したという説がありますが、いずれが正しいかは不詳です。これが呼び水となって、世界各国の503クラブからの分を含めて、合計89,000ドルの義援金が寄せられました。東京クラブはこの資金で、東京と横浜の小学校188校への備品寄贈、東京孤児院の新築、殉職警察官遺族の援助、木下正中会員の産科病院再建事業をおこないました。東京孤児院は翌年完成し、ロータリー・ホームと呼ばれていましたが、太平洋戦争で消失し、現在は残っていません。ここに、東京および大阪クラブのロータリアンは社会奉仕および国際奉仕の何たるかを身をもって理解し、今まで月一回であった例会を毎週開催するように改め、ロータリーについての勉強をし、もろもろの実践活動にも移りました。

さて、東京クラブの例会をわずか2回出席しただけで、大阪に転勤になった福島喜三次は、大阪で星野行則とロータリーについて相談しました。星野は1922年（大正11年）シカゴの国際ロータリー本部で事務総長チェスレイ・ペリーに会い、ペリーから熱心に大阪クラブ創立を勧められ、その委任状を渡されました。星野は帰国後、福島と相談して大阪クラブ創立の準備にとりかかり、1922年（大正11年）11月1日に第1回創立準備会を大阪中之島の大阪ホテルで開きました。その時集まった者は、わずか10名にすぎなかったが、その後、人を集める努力をした結果、11月17日に25名のチャーターメンバーで創立総会を開くことに成功しました。ここに、我が国2番目のクラブとして大阪クラブが誕生しました。会長星野行則、副会長村田省蔵、幹事福島喜三次が就任し、登録番号1349号、日付は1923年2月10日でした。

この時には、すでに1922年の標準クラブ定款が成立していたので、毎週例会が義務づけられていたにもかかわらず、例会は月2回の偶数週金曜日でしたが、この年の8月からは毎週例会となりました。

ちなみに、会費は入会金20円、会費年額40円、例会費40円でしたが、毎週例会を開くことになってから例会費は100円に値上げされました。
大阪クラブは、チェスレイ・ペリーの強い影響を受けて設立されたこともあり、管理運営面の充実を図り、出席規定の厳守、例会時間の励行、クラブ歌の制定、親睦会、定款翻訳などが積極的に実行されました。
関東大震災を契機として、日本のロータリー運動は本格的になってきました。しかし、国際ロータリーの各クラブに対する監督指導の目的で、イギリス、アイルランドを除く世界の多くの地域に「地区制」が敷かれ、各地区にガバナーがいて指導の責任をとっていたにもかかわらず、日本にはまだそれがなく、国際ロータリーが「スペシャル・コミッショナー」を任命して、ロータリー運動の発展の指導にあたらせました。この初代のスペシャル・コミッショナーに米山梅吉が任命され、その指導のもとに、大阪クラブをスポンサーとして、1924年（大正13年）8月に神戸クラブが、同年12月に、東京クラブをスポンサーとして名古屋クラブが創立されました。1925年（大正14年）9月には、京都クラブ、1927年（昭和2年）6月には、横浜クラブが創立されました。

これと同時にロータリー運動の波は、当時日本の勢力下にあった東洋の諸国におよび、1927年8月には朝鮮の京城にクラブができました。その後も1928年12月には満州に大連クラブが、その翌年には、奉天にもクラブができ、さらに1930年にはハルピンに、1931年には台北にクラブが創立しました。

1926年（大正15年）に米山梅吉は国際ロータリー理事に任命され、この年に、「全日本ロータリークラブ連合会」が結成され。5月15・16日に大阪で「インターシティ・カンファレンス」が開催されました。これが各クラブが一堂に会して共通の問題を討議した始まりでした。この時の議題は、①日本ロータリー連合会を作るかどうか、②さらに各地にロータリークラブを作るかどうか、③ロータリー存立の本義や実践について広報する方法などについて論議されました。そして1927年10月22日に6クラブ家族を含めて252名が出席して東京で開かれた第2回インターシティ・カンファレンスで、日本、朝鮮、満州を合わせて、「地区」を結成しようという決議をおこないました。しかし、国際ロータリー理事会からは、時期尚早ということで否決されました。翌1928年5月5日に第3回インターシティ・カンファレンスが名古屋で開かれ7クラブ家族を含めて270名が出席し、奉仕の理想の積極的な実現方法を論議し、さらに再度、日朝満一地区制定を決議しました。第3代スペシャルコミッショナーであった、平生釟三郎の強い要請で、ついに1928年7月に第70地区として認められ、初代ガバナーに米山梅吉が就任しました。当時クラブ数が少ない地域を地区として承認することにはかなりの無理があり、日本の強引な提案にアジア各地のクラブからの反発もあり、RIがしぶしぶ承認したというのが真相のようです。その後米山梅吉は、初期の地区活動の育成のため、3期連続してガバナーに就任しました。

この頃になると日本のロータリアン達は、初期の頃のアメリカ文化直輸入式的な風習も消えて、一方においてはロータリー哲学の真面目な探究をおこなうと同時に、多面においては日本独自の風習に合ったロータリー運動育成をおこなおうとする傾向がみえてきました。そのため、ロータリーの綱領やクラブ細則も、それまでは英語ばかりが用いられていたのに対して翻訳を始めるべきだとの提案がなされました。そして毎年の地区大会では、今日の立場からみても高度な水準に達した論議が、「奉仕の理想」の分析や「ロータリー標語」の解釈についてたたかわされていました。

しかし、当時のロータリアンの知性の高さに対して、一種異様に感じられるものに、極度に厳格な限定会員制度がとられていたことです。彼らは、ロータリアンとしての高度な知性を磨き、そしてその高度な知性の維持の原因を、ひたすら自分らがエリートであるところにおいているように思われます。このようにしてロータリアンの質ということが、今後さまざまな形で日本ロータリーにおいて問題となってきます。

1928年（昭和3年）10月1日に、国際ロータリーの第2回太平洋地域大会が東京で開かれたときも、当時の日本のロータリアン達は、ハワイ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドから来訪したロータリアンを前にして、まことに盛大で有意義な集会をもち、国際理解と友情を深めることに成功しました。

また、ロータリーらしく時間を厳正におこなわれ、当時時間に大変曖昧であった日本の社会からも注目を集めました。

1929年4月27日米山ガバナーのもと、第一回第70地区年次大会が京都で開かれました。1931年8月には井坂ガバナーによって、初めてガバナー月信が作られました。その中で特に業務上の賄賂の厳禁を求め、且つロータリー活動はその六つの綱領の達成に限るべきで、慈善に走ったり、寄付集めに浮身をやつすことのないよう要請しました。1931年7月19日京都で、11クラブ42名が出席して地区協議会が初めて開催されました。そして会員資質の向上や新クラブ設立などが議題となりました。

1933年（昭和8年）になると、ロータリー拡大と会員層の若返りが一部指導者の間で重大問題となりました。地区大会で若い有望人の入会が要望され、量より質という考え方が現在とは違った意味で前面に強く出てきました。すなわち、金満家で社会の指導者でしかもロータリーの精神を体しているのが質の良いロータリアンと考えられ、現在はそれほどでなくても、将来は財力と指導力と奉仕とに優れた者になる見通しのある若者を、多数入会させることが量の問題と考えられました。

現代では、質の良いロータリアンというものに、奉仕の精神のみがいわれ、当時のように社会的名声や財力を決して質には考えていません。このように、当時のロータリアンには財力が大きなウエートを占めており、それが現在でもロータリアンは金持ちの昼食会だと、やゆされる一因となっています。

1922年にヨーロッパで最大のロータリークラブ数を擁するイギリスとアイルランドがRIBIを結成したことから、世界各地でRIの管理から離れて、地域分権を求める気運が高まりました。日本も、日本、満州、朝鮮でRIJMを結成しようとする「ロータリーの日本化」が真剣に論議されました。

1933年からロータリーの拡大運動とともに、日本的に消化されたロータリー思想の普及が大いにおこなわれ、ロータリーソングなども日本人が作詞し作曲したものが歌われたりしました。「奉仕の理想」「我らの生業」などのロータリーソングはこの一連の「ロータリーの日本化」の流れの中で、1935年（昭和10年）に作られたものです。ロータリー哲学の問題にしても、東洋思想たとえば儒教倫理や二宮尊徳の思想と「奉仕の理想」との相関関係が討論されました。ついには、ロータリーの綱領も日本風な表現をとるべきだとの主張がなされました。これは、1934年（昭和9年）に神戸クラブから提案されたロータリー用語に外国語を廃止し、例会様式の外国模倣をやめて日本式に変え、ロータリー標語をわかりやすい日本語に変えようとする流れを汲むものでした。

なかでも、1936年（昭和11年）に神戸で開かれた第70地区大会で、神戸クラブの直木太一郎が大会宣言として、大連クラブのロータリー宣言「大連宣言」を採択せよとの動議を提出したとき、会のクライマックスを迎えました。大連クラブの宣言は大連クラブ会員古沢丈作の作で、ロータリーの綱領を翻訳という方法によらないで日本風に表現したものです。

《 大連クラブのロータリー宣言 》

第一 須らく事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし。蓋し事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり。故に吾人は道義を無視して所謂事業の成功を獲んとする者に与えず。

第二 成否を曰うに先立ち退いて義務を尽くさんことを思い進んで奉仕を完うせんことを念う。自らを利するに先立ちて他を益せんことを願う。最も能く奉仕する者最も多く満たされるべきことを吾人は疑わず。

第三 或は特殊の関係を以て機会を壟断し、或は世人の潔しとせざるに乗じて巨利を博す。これ吾人の最も忌む所なり。吾人の精神に反してその信条を紊るは利のために義を失うより甚だしきは無し。

第四 義を以て集り、信を以て結び、切磋し、琢磨し、相扶け相益す。これ吾人団結の本旨なり。然れども党を以て厚くすることなく、他を以て拒むことなく、私を以て党する者にあらざるなり。

第五 徒爾なる角逐と闘争とは世に行わるべからず。協力を以て博愛平等の理想を実現せざるべからず、然り吾が同志はこの大義を世界に敷かむがために活躍す、吾がロータリーの崇高なる使命茲に

在り。その存在の意義亦茲に存す。

これに対して、議論は沸騰します。反対論に立ったのは米山梅吉らで、ロータリーの綱領は正式の国際ロータリー大会の議決であり、勝手に日本文によって修正できないものであるとし、賛成論者は、村田省蔵らで、正しい日本語と東洋的思考からロータリー宣言を英訳することによって、逆にこれをロータリーの綱領として正式に提案すべきであると主張しました。中間派が、これは正式のロータリーの綱領を修正するものでもなく、むしろその意味を補充説明するものであるから、このまま地区大会の宣言として採用して差し支えないと主張するに及んで結論に達しました。この宣言文は、この時代のロータリアンの思想の深さと、日本的咀嚼のよい実例とみることができます。

このようにして、ロータリー運動は思想的に、また組織的にも発展していきましたが、世界はナチズムの台頭とともに軍国主義的になり、ロータリー運動に対する弾圧の魔の手が及んできました。1931年満州事変、1933年国際連盟脱退などをきっかけに、ロータリーという名前や、その本部がアメリカにあることから、秘密結社やスパイと疑われました。

1935年（昭和15年）に東京の三越で、内務省および陸海軍省の後援のもとで各種の秘密結社のスパイ活動の展示があったとき、その結社の中にロータリーが加えられており、これを知って抗議をおこなったところ、陸軍中将四王天延孝は、「ロータリーはフリーメイソンの一派の秘密結社で、スパイの温床である」と演説したり、また同趣旨のことを書いたパンフレットを配布されることもありました。また神戸では例会でマルクス批判を聞いて会報に載せたということで警察に呼び出され、ロータリーは左翼と関係があるとして取り調べを受けたり、右翼団体や軍部から再三にわたる嫌がらせや、干渉を受けることになりました。神戸クラブの小菅金造は、彼の親友で当時の大阪控訴院長、後に大審院長となった長島毅から「君は知らなくてもスパイの手先になっているんだよ、早くロータリーを退会したほうが安全だよ」と忠告されましたが、これなどは当時の知識人でもいかにロータリー運動について無知であり、誤解していたかを物語るものです。

クラブ旗の横に、日の丸を掲げ、月初めに君が代を唄うという、現在では極く普通の例会風景も、実は国家への忠誠心を示すために考えられたこの頃の歴史的な名残りであるといわれています。1939年（昭和14年）に、日本のロータリアン達は、なんとかこの弾圧から逃れるためにも、国際ロータリーの監督から独立し、イギリス・アイルランドが組織したRIBIのような自治体を、日本、満州を限界として作ろうとしました。しかし、国際ロータリー理事会の反対で成功せず、ただ、第70地区を朝鮮、台湾、満州を含む三つの地区に分割し、その三地区の統括機関として、“日満ロータリー連合会”が結成されました。この連合会結成は、軍部の矛先をかわすために考えた最後の手段であり、米山梅吉より全権を委譲された東京クラブ芝染太郎が、重大な決意のもと、チェスレイ・ペリーとの交渉に望んだといわれています。

1939年8月26日第70地区協議会を開催し、9月15日に新しい規約もできあがり、第70地区を3つの地区に分け、第70地区が名古屋以東の20クラブ、第71地区が西日本と台湾の19クラブ、第72地区が朝鮮、満州の3クラブとなりました。そして日満ロータリー連合会初代会長に、米山梅吉が就任しました。この頃よりますます世界情勢が緊迫し、第二次大戦へと突き進んでいくのです。1940年5月5・6日、第1回日満ロータリー地区連合年次大会が横浜で開催されました。その時皇軍に対する感謝と傷病兵士慰問などの件が決議されました。

これらの日本ロータリークラブの運動にもかかわらず、日本国全体の動きは、ロータリーを認めようとせず、各クラブは動揺しました。例会に憲兵や警察の特高係が参席したり、卓話の内容を事前に警察に提出しなければならない状態になっていきました。そのうえ、日満ロータリー連合会会長米山梅吉が当局に呼び出され、ロータリーの組織機構は大日本帝国に対する反逆であると極言されるにいたりました。1940年（昭和15年）には脱会が相つぎ、ついに全ロータリークラブが国際ロータリーからの離脱を余儀なくされ、解散の憂き目にあうことになりました。この時まで全国に37クラブがあり、そのほ

かにも台湾に3クラブ、朝鮮に4クラブ、満州に4クラブが存在し、会員数は2122名でした。

戦時中解散させられ、国際ロータリーを脱会していた各クラブは、東京水曜会、大阪金曜会、神戸木曜会、西宮火曜会、横浜同人会、岐阜金曜会、名古屋同心会、今治木曜午餐会、札幌職能協会など、例会日をクラブ名にしたりして、あたかも隠れキリシタンのごとく密かに活動を続けていました。

彼らの例会活動をみてみると、組織が壊滅したにもかかわらず、その行事のもちかたがロータリーの例会と変わることなく続けられたことは、驚くべきことです。このことは、国際ロータリー離脱後、日本各地にふみとどまった多くのロータリアン達が、大連宣言にもみられるように、ロータリーを地域社会の良質な職業人の切磋琢磨を通じて、ロータリアン各自の経営感の質を高めようとする個人倫理を中心とする一つの思想開発の世界として理解し、これが一つの確信にまで高められていたことが分かります。会員の中から出征するものがでたり、食料が配給になるなどの時世の中、例会は黙々と続けられました。しかし、第二次大戦末期には、クラブ間の横の連絡も途絶えてしまいましたが、致し方ないことでした。

このような状況でしたから、戦争がアメリカの勝利に終わると、日本のクラブは一斉に国際ロータリーへの復帰を望みましたが、そう簡単にはいきませんでした。彼らの復帰を阻む最大の障害は、戦争にありがちな戦勝国民の敗戦国民に対する憎悪でした。ロータリーのような相手の身になって考えようとする団体に、この種の感情が作用していたことを知ることは大変悲しいことですが、東京水曜会が、帰米元会員や占領軍司令部関係のロータリアンを通じての働きかけは全くナシのつぶてでした。
このような暗い時期にさらに悲しい出来事がおこりました。日本ロータリーの創始者で運動の中心人物であった米山梅吉が1946年（昭和21年）4月28日に沼津で死去し、さらに福島喜三次が同年9月17日に死去しました。ちなみにロータリー創始者ポール・ハリスも1946年（昭和22年）1月27日にこの世を去っており、当時全世界的に世代交替の時期を迎えていました。
1947年（昭和23年）3月、東京、大阪、神戸、京都、横浜といったような戦前からロータリー運動において指導性を発揮してきたクラブの役員の合議により、国際ロータリー復帰協議会を組織しました。会長に東京水曜会会長小松隆が就任しましたが、小松が連合軍司令官の追放令の適用を受けるにおよんで、この禍が日本ロータリーの国際復帰におよぶことをおそれて、自ら辞任し、後任に手島知健が就任しました。

この時、復帰協議会の会計であった東京水曜会の柏原孫左衛門が、国際ロータリーを説得する一手段として、昭和15年に国際ロータリーを離脱した後における日本各地の諸クラブが、現実にどのような活動をしているのかの実態を調べる必要があるとの問題意識から、当時の劣悪な汽車に乗り、北は北海道から、南は九州にいたるまで、各地のクラブの実状をその目で調べて歩きました。その結果、約半数のクラブと約半数のロータリアンで、古きロータリーの伝統を守っていたという事実が明らかとなり、これが国際ロータリーを動かしました。
他方、国際ロータリー側も決して日本のロータリーの国際ロータリーへの復帰の願望を全く無視していたわけではありません。1947年（昭和22年）には当時、国際ロータリー副事務総長で、後に3代目の事務総長になったジョージ・ミーンズが、インド訪問の帰りに予告もなく東京水曜会の例会に出席し、事実調査をしてエバンストンに戻りましたが、その時のミーンズの態度が、日本側の願望に対してかなり冷たいものであったため、日本側もかなり失望しました。しかし、国際ロータリーの中で、日本復帰に最も好意的な立場をとるイギリスのケンドリック・ガンジーとオーストラリアのアンガス・ミッチェルの決断により、1948年（昭和23年）の国際ロータリー理事会は、ガンジー議長のもとに、日本のクラブを国際ロータリーに復帰せしむべき決議をおこない、次いで翌年の理事会は、ミッチェル議長のもとで、日本のクラブの国際ロータリー復帰のための具体的方針を決定しました。
この方針を受けて副事務総長のミーンズは国際ロータリー理事会の命を受けて、予告もなく東京に飛来し、復帰協議会の役員と会い、国際ロータリー理事会の決定を伝えました。その内容は、戦前のクラブを全部一度に復帰させることは、労多くして功少ないので、まず日本を経済的に5つに分け、それぞれに1個のクラブを復帰させ、後はそれぞれのクラブの分家クラブとして順次復帰をかなえていく

べきであるということでした。これに対して、日本の戦前のクラブは、その歴史的伝統をふまえて受けとめたため、多少の意見の衝突をきたしました。札幌、東京、大阪、福岡についての復帰はまず決まりましたが、残る一つを京都と神戸で争いました。神戸はロータリー運動史上も活動上も重大な役割を果たしてきたクラブです。一方京都は日本の古都です。結局国際ロータリーが折れて、1クラブ増加させ、6クラブの復帰が決まりました。

戦時中の第70地区はすでに他国の地域に割り振られていたため、第60地区が日本のクラブ群に割り振られました。復帰協議会会長手島知健が戦後初代ガバナーに選ばれました。このようにして戦後の日本のロータリー運動が開始されました。
戦後の日本ロータリー活動の特色を述べると以下のようになると思われます。

まず第一に、ロータリークラブが日本全国津々浦々にまでできあがったことです。これは一つにはRIの基本方針が拡大に力点をおいたと言うことに原因があるでしょうが、いま一つの大きな原因は、戦前の日本の社会におけるロータリアンが、地域社会に与えたロータリー運動の影響の強さにあるといってよいでしょう。ロータリー運動は偉大な指導性をもつ職業人の社交クラブであるという一般社会の印象があまりにも強かったことが、戦後のクラブ拡大に寄与したと思われます。そして、1952年（昭和27年）には日本全国のクラブをRIが一地区で管理することができなくなり、東西2地区に分割されました。2地区に分かれた時、日本のロータリアンの共通の情報源が必要であるとして月刊誌「ロータリーの友」が発行されるようになりました。
地区分割はその後も進み、1954年（昭和29年）には4地区となり、1957年（昭和32年）には5地区、1959年（昭和34年）には6地区と増え続け、1996年（平成8年）には34地区、2202クラブまでになりました。

第二の特色は、運動の中心が奉仕哲学の提唱から、実践の提唱に変わったことです。戦前の日本ロータリアンは、ロータリー運動から経営哲学を学びとろうとし、それを理解することで満足していたようです。もっともこの点はアメリカやヨーロッパのロータリアンにもいることですから何も日本だけの特徴ではないかも知れません。

日本のロータリークラブの数が増えるにつれて、RIに対する発言力も増し、日本からRI会長が選ばれるようになりました。最初に、RIより指名を受けることに内定していたのは、東京クラブの小林雅一でしたが、彼の急死のため東ヶ崎潔が1969年の会長に選ばれ、また1983年には中津クラブの向笠広次が二人目の会長に選ばれました。また、1970年よりはRI理事に日本人が入るようになりました。国際大会も1961年と1980年に東京で開かれ、2004年には近畿で開かれる予定になっています。

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集　Ⅰ
・職業奉仕講演集　Ⅱ
・職業奉仕講演集　Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第12章

例会出席とメークアップ

ロータリーライフの第一歩は、まず毎週例会に出席することから始まります。現在、①ホームクラブに半期30%以上出席、②メークアップを含めて半期60%以上出席、③連続4回以上欠席してはならないと規定されています。この規約は、会員身分を保障するための最低条件に過ぎません。ちなみに、連続4回以上欠席すると自動的に会員資格を喪失するという規定は、1905年3月23日、ロータリーが発足してからわずか3回目の例会で決められたものです。メークアップ制度ができたのは、ずっと後の1922年です。例会出席は、友情の証であり、四回も続けて休むような薄情な人に真の友情を期待することは不可能だとして、即、退会という結論が出たのです。

なぜロータリーは例会を強調するのでしょうか、クラブ奉仕部門の補助文献324号にそのことが記載されていますので紹介いたします。

1.ロータリーの原則であるところの知り合うこと親睦とは、クラブの例会に常に出席することによってもっともよく伸展させることができるのである。
2.彼の属する職業界にロータリーを代表することを承諾したロータリアンは、例会に常に出席することによってのみ、その職業に従う人々に持ち帰るべきロータリーからの土産を得ることができるのである。
3.充分知識のあるロータリアンになるためには、例会に出席してクラブのプログラムやその活動からロータリーについて学んでこそなり得るのであり、またクラブにおいて活動する一会員となることによって完全に同化されるのである。ロータリーにおいて活動することによってのみ、その特典を受け得るのである。
4.ゴルファーはリンクスで、ボウリングはアレィで、テニスはコートでそれぞれ球を追うことを練習するのである。これと同じくロータリアンがロータリーを習うべき場所は例会においてなのである。
5.ロータリーとは人々が集まり、各自の品を他の人々と交換して、その経験をさらに豊かにするところの宝を持ち帰る一つの市場である。したがって例会へは各自の商品である友情、親睦、微笑及び挨拶を持って出席し、逢う人ごとにこれらを提供し、その代わりとして、必ず到着した時よりも多くの精神的利益を得て帰途につくに定まったものである。したがって例会に出席しない人はこの有利な交換の機会を失うことになるのである。

ロータリーの奉仕哲学は「利己と利他の心」をたくみに調和させる哲学です。ロータリークラブが職業人の集団である以上、会員の事業の安定と発展なしにはロータリー運動を維持することはできません。ロータリアンの事業の安定を図る方策は、物質的互恵から精神的互恵を経て、職業奉仕の実践に移行し現在にいたりました。奉仕哲学を探究しつつ、永年のロータリー活動を通じて蓄積された膨大な情報こそ、ロータリアンの事業を発展させ、企業経営に健全に導く貴重な情報ともいえるでしょう。

善意に満ちたロータリアンが毎週1回集う例会は、あらゆる職業情報の交換の場でもあります。一業一会員の原則で同業者は排除されていますから、どんな深刻な問題でも機密事項でも、他に漏洩したり本人の不利になることなく、皆が真剣に相談相手になってくれるはずです。その前提になるものこそ、ロータリーの友情なのです。
アナハイムの国際協議会の会場入口には、「入りて学び、出でて奉仕せよEnter to learn, Go forth to serve」の看板が掲げられました。この言葉はロータリーの会合に参加するときには、その会合を通じ

てロータリアンとしての心を磨くという目的意識を持って参加し、会合を終えてコミュニティに戻れば、奉仕の心を実践に移すことを意味します。

米山梅吉は「ロータリーの例会は人生の道場である」と語っています。例会の目的は、職業上の発想の交換を通じて、分かち合いの精神による事業の永続性を学び、友情を深め、自己改善を計ることにあり、その結果として奉仕の心が育まれてきます。自己改善は終生続けられるべきですから、ロータリアンに定年はないし、ロータリー運動には終結もありません。例会出席がロータリーライフの前提となるゆえんはここにあるのです。

例会は、お互いが切磋琢磨して自己研鑽に励む貴重な修錬の場であるがゆえに、例会運営にあたる人は、事業に従事すべき貴重な時間を割いて例会に参加する会員に、それに値するメリットを与える義務があるのです。限られた時間の中で、いかに有益な情報を効果的に提供するかを真剣に考えて実行しなければなりません。参加者の心に深い感銘を与える内容であってこそ、例会出席の意義が満たされるのです。

例会の場を通じてロータリーの理念を学び、自己改善を積んだからこそ、下請業者や従業員や顧客の犠牲のもとに不当な利潤を追求したり、後ろめたい気持ちで濡手に粟の暴利を貪るよりも、企業モラルの昂揚を目指しながら、信頼に基づいた継続的な取引の中から適正な利潤を得ることが、事業を成功に導く道であることに気づいたのです。

例会で学んだ奉仕の理念を、自分の職場に活かすとともに、自分が属する業界に広め、地域社会全体の職業モラルを高めることが職業奉仕だと考えれば、例会を休むことは、自分自身はもちろんのこと会員全体に、さらに地域社会の全てに大きな損失を与えることになります。

↑概論トップ

←BACK”日本のロータリー史” NEXT ”一業一会員制”→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集 Ⅰ
・職業奉仕講演集 Ⅱ
・職業奉仕講演集 Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第13章

一業一会員制

ロータリークラブ設立にあたって、ポール・ハリスはロータリー運動を正しく維持していくための前提として「一業一会員制」を固辞していくことが欠くことのできない必要条件であると考えました。

ロータリークラブが一業種一人で選ばれた良質な職業人で構成されることは、他の類似クラブには無い特徴のひとつです。会員を一業種から一人選んだ理由は、同業者がいると自然に利害関係が生じて。親睦が阻害されると考えたからです。特に、初期は会員間の物質的互恵主義が基本でありましたから、なおさら一業種より一会員でないとクラブの存在意義がありませんでした。しかし、現在のクラブで親睦のために同業者を排除するという理論は納得いく説明ができないものになってきています。現に、制度上からも、アディショナル会員制やシニア・アクティブ会員制などの導入によって、厳密な一業一会員制は崩壊しつつあります。

ロータリークラブには、業界が特定の人を会員として推薦したり、自分がロータリーに入りたくて自薦する手続きは存在しません。その人を熟知している会員がいて、ロータリアンとしてふさわしいと認め、他に同業者がいないことを確認した上で、その人を候補者として推薦する手順を踏むことになります。一業一会員の選定とは、業界や本人が代表者として認めたからではなく、ロータリークラブが、その人をその人が属する業界の代表者として選ぶことです。全てのロータリアンは、その人が属する業界にロータリーが派遣した大使だとする考え方です。ロータリーの目標は、会員各自が奉仕の哲学を理解し、ロータリーが蓄積している数多くの職業奉仕事例を実践することによって自己改善を計り、一層高まった職業モラルを、その人の職場や業界へと広げてもらうことにあります。

職業は一般に事業と呼ばれる業務と、専門職務と呼ばれる医師、教職、法曹職、宗教職等の業務に分けられます。中世の中で、王、貴族、武士（騎士）、農民、奴隷といった世襲的な階級制度社会の中で、本人の努力次第で、身分の枠を超越して勝ち取ることができる特殊な地位を占めていた神職が、専門職務の始まりといわれています。神職はやがて医師や教職に分化していきますが、専門職として手厚く遇されていたので、その業務に対して見返りを請求する必要はありませんでした。その本質は現在も同様で、専門職務は利潤を追求する目的で業務をおこなうものではなく、特殊で高度で専門的な業務遂行に対して、感謝の念を込めた謝礼が支払われる性質のものです。だから業務の執行にあたっては、まずその業務の倫理基準が優先され、対象が何人であろうとも、また支払われる対価に左右されず、全力を傾注すべきという高い職業倫理が要求されます。

一方、事業などの商取引においては利潤を得ることは当然のことであり、問題は何をもって適正な利潤と考えるかにあります。取引の原形は物々交換をもって始まり、やがて需要の二重一致の煩雑を解決するために貨幣が考案されます。そして物とお金との交換の段階で利潤の概念が生まれてきました。

事業は、その利潤を適正に保つことによって得た信用を基本にして、永続性のある取引を続けることが大切であり、濡手に粟の一攫千金を夢見るあまり、品物の価値を無視した法外な利潤を要求したり、原価を下げるために下請や従業員を不幸にしたり、実体の伴わない利潤の追求に走ったりすることは、許されないことだと考えなければなりません。

ロータリーでは、事業と専門職務を一体化して、Vocationと呼び、全ての職業は有為な「天職」であると考えて、ともに高い職業倫理を要求しています。ロータリーで会得された高い職業倫理は、まず最初に自分の職場で反映されなければなりません。良質な職業人とは、自分の幸せは自分の周りにいる人の幸せと無関係ではないことを自覚した人のことをいいます。顧客や取引先や従業員や下請の人々の幸福を考えて事業をおこなってこそ、始めて自分の事業を健全に経営していけるのです。

ロータリーの「一業一会員制」のために、ある人が代表として入会すると、その地域の同一職業の他の職業人は全員、ロータリー活動に参加できなくなります。これが、一般の人からロータリーは閉鎖的、特権的クラブといわれる原因であり、これに対する不満と批判から誕生したのがライオンズであるといわれています。

ロータリークラブの基本原則として永年守られてきた「一業一会員制」も、時代の流れとともに徐々に枠が広げられつつあります。同一テリトリー内における二階建、三階建のクラブの設立は、ロータリーの基本原則を崩すことなく、同一職業の他の職業人のロータリー運動に参加する機会を与えました。

制度面から一業一会員制を崩したのは、アディショナル正会員（1915年導入、1960年、1992年、1995年拡大解釈、2001年廃止）、パスト・サービス会員（1930年申告制、1992年自動的移行、1995年拡大解釈、2001年廃止）、シニア・アクティブ会員（1939年申告制、1968年自動的移行、2001年廃止）制度の導入です。アディショナル正会員は、そのいずれもがすでに同一職種で会員になっている人の承諾があって、始めて入会が許されますから、いわば合意の上ということになります。パスト・サービス会員もすでに職業を失っているという前提ですから問題はあまりありません。しかし、シニア・アクティブ会員の場合は若干事情が異なってきます。年齢によって差があるものの、最短でわずか5年、最長でも15年在籍することによって自動的にシニア・アクティブ会員に移行し、職業分類を失うことになります。そのため、30代、40代で入会した場合、シニア・アクティブ会員になったときにはまだ現役の職業人です。シニア・アクティブ会員になったことで、職業分類が開放され、同一職業の人が入会するという事態になってしまっていました。

これら矛盾を解消するために、2001年の規定審議会においてアディショナル正会員、パスト・サービス会員、シニア・アクティブ会員は廃止され、正会員と名誉会員の2種類だけとなりました。しかし、すでに各ロータリークラブには同一職業の人が入会する事態となっていたため、一業種5人まで同一職業を認めるというロータリーの根幹を犯しかねない状態となってしまいました。（一業種5人までは、会員数50人以下のクラブの場合であって、それ以上の会員数のクラブは10%以内とすることになっています）

運用面から一業種一会員制を崩しているのが、職業分類の細分化と専門家です。「外科」の職業分類が充填されている場合、同じ外科医を「胸部外科」「消化器外科」というようにする手法です。ロータリーの原則からすると、あまり褒められた手法ではないと非難がある一方で、今まで職業分類の壁に阻まれて入会不可能だった良質な会員を獲得するための方法として採用しているのが現状です。

職業分類の基準が乱れてきた責任の一端は、1968年度のRI理事会決定にあるといわれています。それ以前は、RIが作った職業分類表をそのまま採用しなければなりませんでした。これが、各クラブだけでなく、国家、地域の特殊性を無視しているという弊害が指摘されました。すなわち、地域に密着した特殊な職業、たとえば「日本刀研磨」とか「ベネチアンガラス製造」といったような職業が、RIの標準職業分類にないからという理由で、ロータリーに入会できませんでした。これらの非難を受けて、1968年、RI理事会は職業分類表の管理を放棄して、その作業をクラブに任せるという措置にでたのです。

クラブの自治権の拡大といえばそれまでですが、この結果、ロータリー運動の基本であった一業一会員制の前提となる職業分類表のRI管轄を放棄した責任は重大です。それ以降、職業分類の細分化が各クラブで進み、同一職業人の入会の道を開くことになり、ついには2001年の規定審議会において一業種一人制の廃止となりました。

↑ 概論トップ

←BACK″例会出席とメークアップ″

NEXT ″親睦と奉仕″→

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.

NEWS
クラブ概況
クラブのあゆみ
淡路子どもの心研修会
ロータリー講座
・ロータリー概論
・職業奉仕講演集 Ⅰ
・職業奉仕講演集 Ⅱ
・職業奉仕講演集 Ⅲ
インフォメーション
会員専用ページ
お問い合わせ
リンク

第14章

親睦と奉仕

ロータリーの二本柱として、ほとんどのロータリアンは「親睦と奉仕」をあげます。親睦と奉仕がロータリーライフを支える二本の大きな柱であることは、疑いのない事実です。親睦が失われればクラブは崩壊するだろうし、奉仕こそロータリー運動の目的であります。

ガイ・ガンディカーは次のように述べています。「しばしば、ロータリアンで親睦を図ることが、ロータリー運動の全てであるように誤解される。また、ゆるぎない親睦こそ、ロータリーが存続する絶対条件だと考えているクラブもある。しかし、これらの二つの立場からの判断には、明らかに批判の余地がある。親睦はロータリー運動そのものではなく、ロータリーという植物が、根をはり、成長するためにどうしても必要な、最上の土壌なのである」

親睦を図りたければ、誰にだって無限の機会があります。気の合った仲間とゴルフや旅行に行くもよいし、カラオケやバーでだって親睦を図ることができるでしょう。一業一会員だなんていわなくても、同業者同士でも充分親睦は図れます。

ロータリーはあえて親睦と奉仕の解釈を、世間一般の人たちが考える解釈と異なる次元においています。ロータリーが定義する親睦と奉仕は、いかなる辞書を引いても正しい解釈が活字化されていないロータリー独自の概念であり、さらにそれを正しく理解しないかぎり、ロータリー思想の原理を語ることはできないのです。

fellowshipを「親睦」と訳したことにも問題があるでしょう。むしろ、「友情」とか「友愛」と訳すほうが理解しやすいかも知れません。ちなみに米山梅吉がポール・ハリスのThis Rotarian Ageを翻訳するにあたって、その書名を「ロータリーの理想と友愛」としたのは、理想＝奉仕、友愛＝親睦を意味するものであり、戦前のクラブ組織表では、親睦委員会の代わりに友愛委員会の名称が使われています。

ロータリーが考える親睦にはどんな意味を持っているのでしょうか。あえて結論を先に述べれば、「親睦」とはロータリー思想が形成され、成長する過程において導き出された概念であって、奉仕の心を作り出すための例会における諸活動のことを指すのです。

ロータリー運動の実体を考える便法として、「入りて学び、出でて奉仕せよ」の考え方がとられていました。例会の場で、職業上の発想の交換を通じて、分かち合いの精神による事業の永続性を学び、友情を深め、自己改善を図り、その結果として奉仕の心が育まれてきます。この例会における一連の活動の前提となるものを「親睦」と考えました。例会で学んだことを実践するのが「奉仕」なのです。「親睦と奉仕」の対比は、「理論と実戦」「奉仕の心の形成と奉仕の実践」「学習の場と実践の場」「クラブ内の運動とクラブ外の運動」にも対比させることができます。

世に有用な職業全てを正業と考えるロータリーの職業観からは、職業の貴賤や上下関係を認めないことは当然として、縦社会の一切をも認めていません。職業を天職と考えるところに、全ての職業は尊重されなければならないという発想が生じ、それが職業倫理を高めるという奉仕の心の形成の発展

をしていくのです。ロータリアン同士が全て対等と考える根底は友情であり、友情あるがゆえに、ある時は師となり、徒となって、互いに切磋琢磨しながら奉仕の心を形成する作業が可能になります。
資本主義を背景に生まれたロータリー運動は、最高の利潤を追求したいという利己心と、「世のため人のため」にいかにすべきかという利他心を調和する哲学でもあります。

永続性のある適切な利潤を、獲得するために到達した経営哲学が、「良質の職業人とは、自己改善を重ねて、自分の職場を健全に守るとともに、取引先、下請業者、従業員、顧客、同業者など、自分の事業と関係を持つ全ての人と幸せを分かち合うことである。そして、その心でもって事業を営めば、必ず最高の利益が得られることを自分の職場で実証することによって、奉仕の精神の必要性を地域全体の職業人に伝えていく」という職業奉仕の理論であり、その理論を研究し、お互いに職業情報を持ち寄ってその具体策を検討するのが例会の場であります。

「奉仕」には概念としての「奉仕の心」と、行動としての「奉仕の実践」の二通りの意味があり、親睦と対比して奉仕という言葉を用いるとき、それは奉仕の実践を意味します。奉仕の心は親睦と同義語だからです。

「奉仕」という言葉から受けるイメージは戦争中なら勤労奉仕であり、現代ならボランティアを意味することが多いように思われます。また、日本語としてサービスという言葉を用いる場合、価格を下げて売ったり、付録をつけることを意味します。
ロータリー用語として、「奉仕 Service」を一言で説明することは難解です。社会奉仕、国際奉仕における奉仕は、ボランティアに近い意味合いを持っています。当然のことながら、その受益者はロータリアン以外の人が対象となります。実践面について、個人奉仕の原則や、団体的金銭的永続的奉仕の禁止などのロータリー独特の制約がつき、さらに、単なるチャリティーを含めないことが他の奉仕団体の奉仕との差かも知れません。

弱者救済の手段として、いわゆるほどこしの奉仕は確かに即効性があります。しかし、飢えに苦しむ途上国に対する援助の例が物語るように、一度援助が開始されると、それに頼りきるあまり、自助努力をする必要がなくなり、援助が途切れた途端、前にもまして悲惨な状態に陥ることがあります。そうかといって、団体的金銭的永続的奉仕が原則的に禁止されているロータリーが、永遠にほどこしを続けることは不可能です。ロータリーがおこなうボランティア的活動は、受益者の立場に立って、その自助努力を助けるための援助に限定されるべきものです。

シカゴクラブがおこなった公衆便所設置運動は、決して金銭的奉仕活動ではありません。公衆便所の必要性を説き、市当局、商工会議所、商店会に働きかけて実現させたものです。ロータリーが目指す社会奉仕、国際奉仕活動は、このようにオピニオン・リーダーとしての役目であることです。

これに対して、職業奉仕における「奉仕」は、ロータリー独特の哲学的な意味合いをもっています。世間一般の人が喜ぶからといって、ボランティアやチャリティー精神で、職業上の技術や製品を無償で提供し続ければ、事業が倒産することは間違いありません。

"profits"を得ることは、健全な職業生活を営むための絶対条件であり、適正な profitsを得て、永続性のある事業を営む前提条件として、前述したように、「自分の幸せは、自分の周りにいる人々の幸せと、決して無関係ではない。良質の職業人とは、自己改善を重ねて、自分の職場を健全に守るとともに、取引先、下請業者、従業員、顧客、同業者など、自分の事業と関係を持つ全ての人に幸せをもたらすことである。そして、その心をもって事業を営めば、必ず最高の利益が得られることを自分の職場で実証することによって、奉仕の精神の必要性を地域全体の職業人に伝えていく」という、日常の職業生活のことを、ロータリーの職業奉仕と呼んでいます。

したがって、職業奉仕という概念は、単に職業と奉仕とを合成した言葉ではなく、ロータリーが作り出した特殊な概念として理解しなければなりません。

さらに職業奉仕には、社会奉仕、国際奉仕と異なって、ロータリアン自身が受益者になることがありえます。職業奉仕を邁進することで、永続的に適正な利潤が得られれば、その利潤のかなりの部分が事業に関係する周囲の人々に還元されるとしても、ロータリアン本人もその恩恵を受けることになります。

クラブ奉仕の概念はさらに難解です。単に、社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕の語呂合わせで使ったという感すら抱かせます。ロータリアンが自分のクラブの運営、管理が円滑に進むように協力することは、当然の義務であり、それにあえて奉仕という言葉を用いることに不自然な感じがします。中国語ではServiceに「服務」という文字を当てています。クラブ奉仕の奉仕はむしろこの「服務」の意味で理解し、さらにクラブ管理に限定したほうが適切かも知れません。

以上のように、一言で四大奉仕といって、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕を列挙しますが、それぞれの奉仕には奉仕の意味が異なってくるのです。

ロータリーはその思考過程の中で独特な奉仕活動を確立しました。奉仕の心を形成するための自己改善の努力は、クラブ例会を通じておこなわれ、その過程で生まれてくるものがロータリーの親睦です。例会で培った奉仕の心を実践に移すのは原則としてロータリアン個人個人の責任であり、その受益者は原則として地域社会全体の人たちです。ロータリーが定義する親睦と奉仕と、世間一般に用いられる親睦と奉仕とは、意味が違うことに留意しなければなりません。

「ロータリーの精神は親睦と奉仕の調和の中に宿る」

1907年から1913年にわたって続けられた、親睦か奉仕かをめぐる論争の中で残された言葉の通り、奉仕の心を育む原動力として、会員相互の親睦は決して欠かすことのできない大きな要素です。親睦と奉仕は、背反関係にあるのではなく、相互に支えながら回転する二枚の歯車と考えなければなりません。

↑概論トップ

←BACK"一業一会員制"

Copyright (C) 2006 Awaji Chuo Rotary Club All Rights Rserved.